

松江市文化財調査報告書第51集

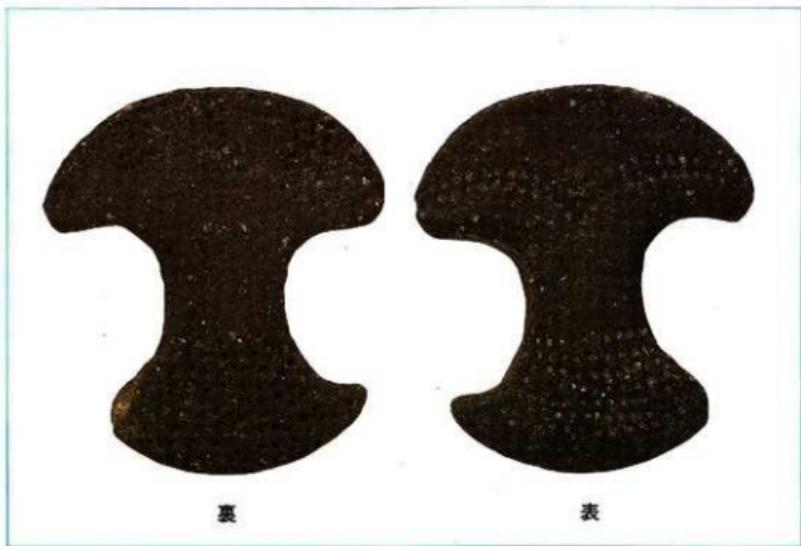


文化財受継
シンボルマーク

夕テチヨウ遺跡発掘調査報告書

1992年3月

松江市教育委員会



裏

表

分銅型土製品(実大)



局部磨製石鎌

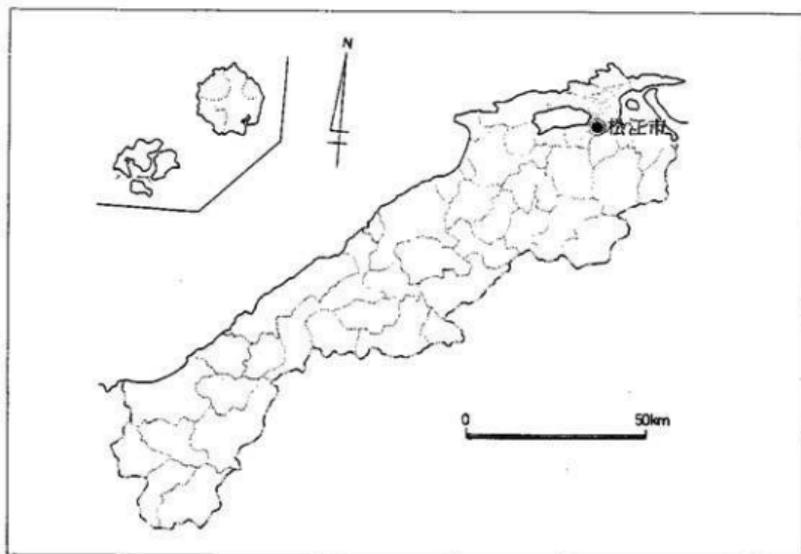
例 言

1. 本書は平成元年度から平成3年度に至る3カ年度にわたって、松江市教育委員会が松江市都市整備部区画整理課から依頼を受けて実施したタテチョウ遺跡発掘調査の報告書である。
2. 調査の組織は下記のとおりである。

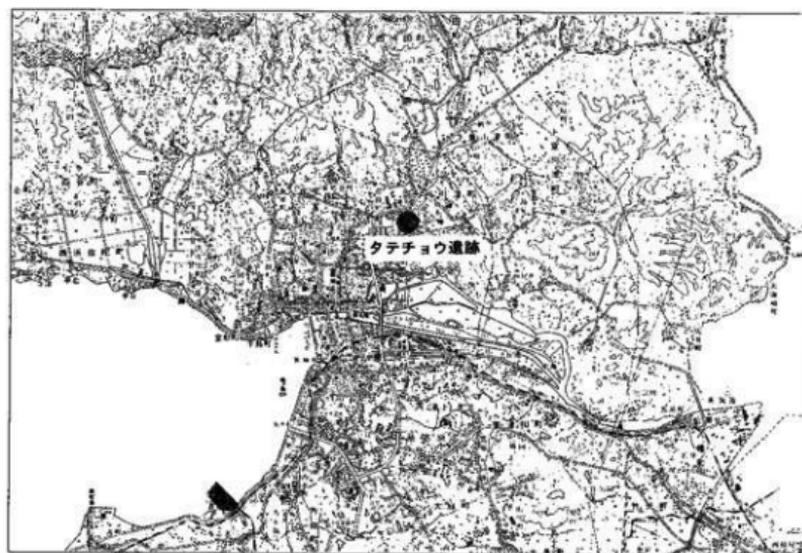
委託者	松江市都市整備部区画整理課
受託者	松江市教育委員会
主体者	教育長 内田 榮（平成元年度まで） 諏訪秀富（平成2年度から）
事務局	社会教育課文化財係（平成3年9月まで） 生涯学習部文化課文化財係（平成3年10月から）
調査担当者	係長 岡崎雄二郎，主事 吾郷雄二，寺本 康
調査員	囑託 稲田 奨
3. 各調査の出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
4. 本書の編集は、係長岡崎雄二郎，主事昌子寛光，寺本 康，飯塚康行，囑託員稲田奨の4名が協議して行った。

目 次

I 調査に至る経緯	3
II 周辺の歴史的環境	3
III 調査の概要	6
1. 範囲確認調査	6
2. 5号水路の調査	13
3. 上迫子笠無線の調査	16
4. 30街区の調査	20
5. 34街区の調査	23
6. 33街区5-2番の調査	41
7. 33街区4番の調査	46
8. 新加羅加羅橋架橋地の調査	53
IV 出土遺物について	73
V 小 結	80



(島根県地図)



(松江市地図)

I 調査に至る経緯

松江市では、住宅需要に対して計画的に住宅地を供給するため、市内西川津町地内の水田地一帯約126.2haを対象に、昭和48年度から松江圏都市計画松江国際文化観光都市建設計画事業北部土地区画整理事業を実施してきた。

昭和62年度に至り仮換地作業が急速に進行し完了した結果、水田地の売買、埋め立て、建築工事が活発化してきたので、区画整理課と協議を重ねた結果、周知の遺跡であるタテチョウ遺跡に該当する部分については事前の調査を実施することになった。

しかしながら、タテチョウ遺跡については従来朝酌川の河川敷と県道上迫子笠無線について、県教委及び市教委で確認調査がなされてきたのみで、区画整理事業区域内の民有地については一体どれだけ部分が遺跡の範囲なのか確認していなかった。

そこで、まずはじめに遺跡の範囲を確認するため、民有地の内17ヶ所を選定した。その結果、第2、3、6、9、10地点において、土器片の包含を確認したので、それに基づいて遺跡の範囲を第2図のとおり線引きし、その内側にかかる開発事業区域については事前に建物部分のみ調査を実施するという基本方針を決定した。

以下は、各開発事業別の調査の概要である。

II 周辺の歴史的環境

タテチョウ遺跡は、西川津町地内を流下する朝酌川の流域に広がる大規模な遺物包含地である。昭和9年、朝酌川の堰設置工事に伴い土器片などが出土し注意された。

昭和24年3月、山本清氏の手によって試掘調査が行われた結果、縄文、弥生、古墳の各時代の遺物が出土する複合遺跡であることが分かり、特に弥生時代前期の土器が認められ学会の注目するところとなった。

遺跡の名称は当初確認された地点の字名「堅町（たてちょう）」から名付けられている。

西川津遺跡は、タテチョウ遺跡の北方、やはり朝酌川の河川敷を中心とした一帯に広がる大規模な遺物包含地で、縄文時代早期末から弥生、古墳、奈良、平安の各時代の遺物が多量に出土しており、タテチョウ遺跡と並び注目される。

つみどこ
埴輪遺跡は、丘陵斜面に立地する古墳時代前期から中期にかけての集落跡で、18棟の堅

穴住居跡が確認されている。

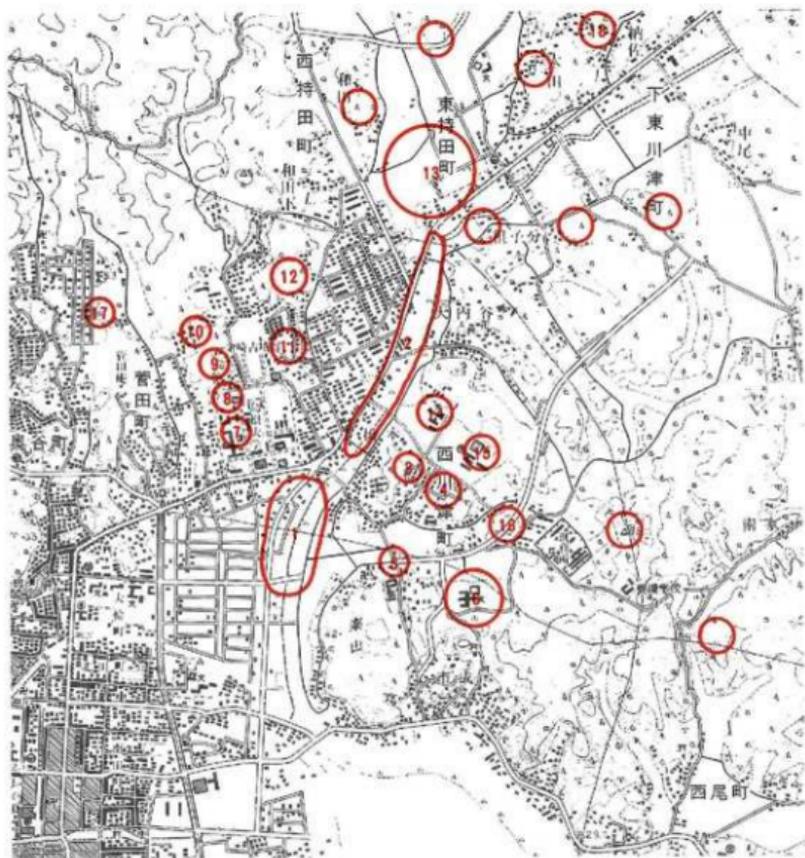
薬師山古墳は、島根大学の敷地の中にあつて、南へ延びた比高20mほどの低丘陵上にあつた中期古墳である。大正11年夏、土取り工事の際に消滅したが、主体部は箱式棺様のもので、遺物は仿製四乳鏡、刀身、鉄鏃、有孔円板状品、土師器（高坏4、小型壺1）、須恵器（甕2、有蓋高坏1、坏蓋3、坏身6、小形壺1、大形壺2個体分）がある。

金崎古墳群は、もと前方後方墳2基、方墳9基からなる中期頃の古墳群だったが、住宅団地造成工事の際、方墳6基が破壊され、消滅した。現在は残る前方後方墳2基と方墳3基が住宅団地の3つの山に分かれて保存されている。昭和32年7月27日付で国の史跡に指定されている。

山崎古墳は一辺19mの方墳で、主体部は地山に掘り込んだ長方形の掘り方の中に木棺を据えたもので、副葬品は鉄剣4、鉄刀1、鈿2、鉄鏃47本以上で鉄器のみを副葬している点に注意される。中期古墳。

柴古墳群は、小規模の円墳1と方墳2からなる中期頃の古墳群である。第2号墳墳頂部出土の須恵器の壺は、山本福年のI期よりも古い要素が認められるものである。

菅田丘古墳は、薬師山古墳の北方に所在した長さ約30mの前方後方墳で、主体部は磯部で玉が出土している。円筒埴輪片が採集されている。中期古墳。



第1図 周辺の遺跡分布図

1. タテチョウ遺跡
2. 西川津遺跡
3. 山崎古墳
4. 柴古墳群
5. 横本遺跡
6. 堤廻遺跡
7. 薬師山古墳
8. 菅田丘古墳
9. 宮田古墳群
10. 上浜弓古墳群
11. 金崎古墳群
12. 福山古墳群
13. 持田川流域条里制遺跡
14. 馬込山古墓群
15. 馬込山古墳群
16. 柴遺跡
17. 松ヶ峠古墳
18. 道仙古墳群

Ⅲ 調査の概要

1. 範囲確認調査

(1) 調査にかかる土地の地番及び土地所有者の氏名

1099-1, 1099-2, 1109-1, 松江市, 1123, 土屋久美, 1124-4, 久保田千恵子, 1130, 奥名信, 1152-1, 久保田明雄, 1154-1, 久保田宏, 1364-4, 高橋一郎

(2) 調査期間

着手 昭和63年2月16日

完了 昭和63年3月4日

(3) 調査面積

60cmグリッド×4箇所 (P1, P4, P15, P17)

1mグリッド×13箇所 (P2, P3, P5~P14, P16)

(4) 調査担当者

松江市教育委員会 社会教育課 文化係主事 吾郷雄二

(5) 調査の概要

これまでのタテチョウ遺跡の範囲は、朝酌川河川敷を中心にその兩岸の水田地帯にも広がっていることが推測されていたが、わずかに上迫子笠無縁で確認されていただけで、水田地帯での調査は実施されていなかった。

北部土地区画整理事業は、この頃、いよいよ換地作業も完了し、住宅や商業店舗建築の計画が具体化してきた。

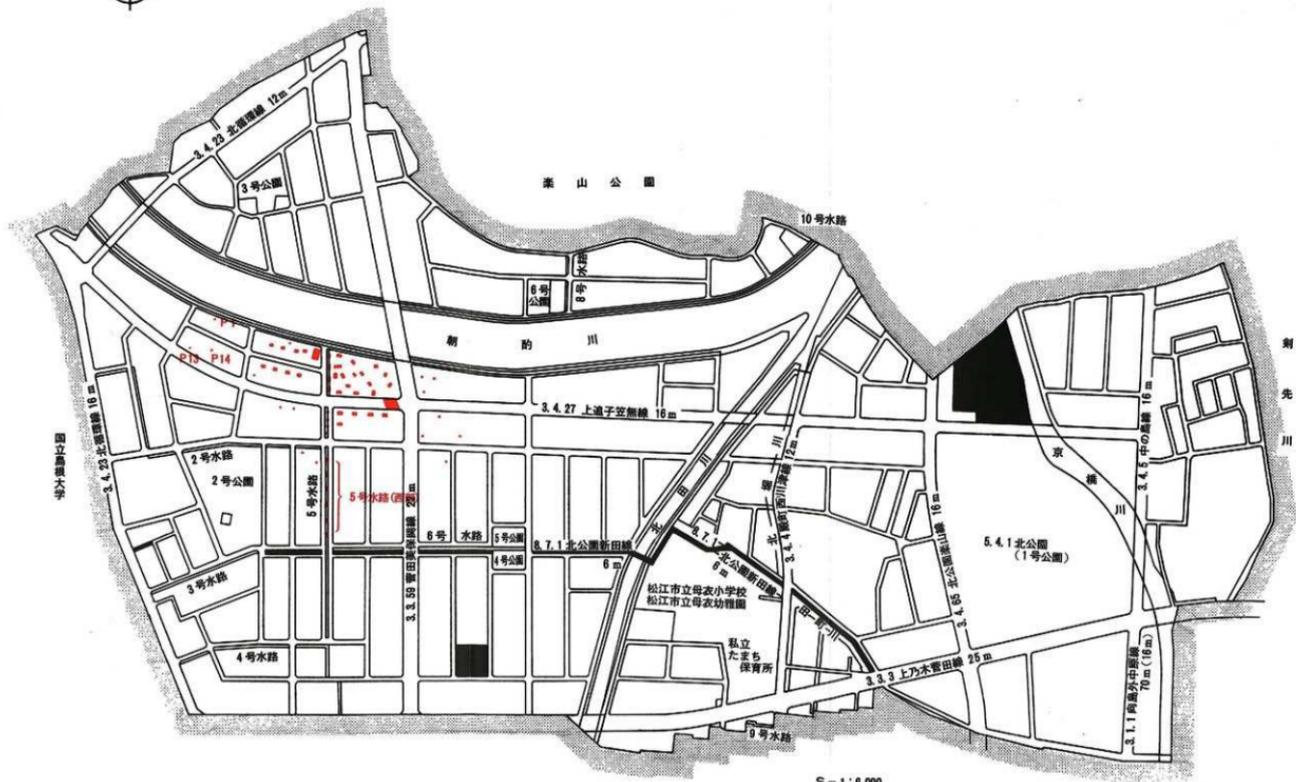
そこで、事前に水田地帯における範囲を確認し、本調査の必要性について判断するため、17箇所の試掘調査箇所を設定し、重機掘削によって遺物包含層の有無を確かめ、遺跡範囲の線引きを行うこととなった。

P1~P17の土層図は、第4、5図のとおりである。この内、土器などの遺物が出土したのは、P2, P3, P6, P9, P10である。遺物包含層は灰色系統の砂層もしくは粘性土層で、標高0から-50cmまでである。

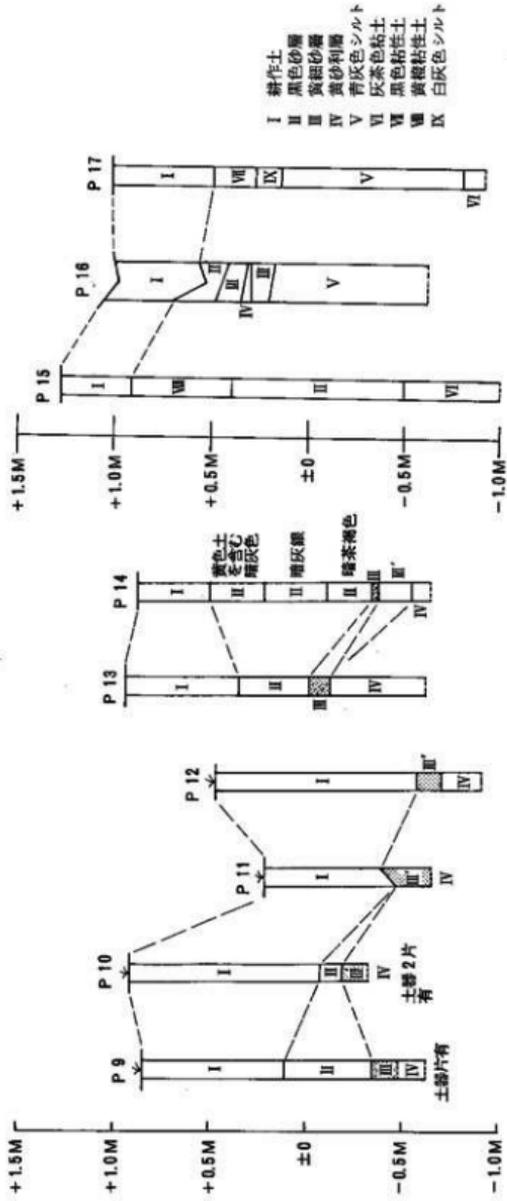
これによって平面的な遺跡の広がりを図示したものが第2図の点線範囲である。一部不明確な部分もあるが、この結果に基づきその後の調査を実施する際の日安とした。



第2図 主要部調査箇所平面図



第3回 調査箇所全体図



第5図 試験調査箇所土層柱状図 (P 9 ~ P 17)

2. 5号水路の調査

(1) 調査にかかる土地の地番

松江市西川津町 北工区5号水路(区画街路9号線, 道路敷)

(2) 調査にかかる土地の所有者の氏名及び住所

松江市

(3) 調査期間

着手 平成元年12月19日

完了 平成元年12月20日

(4) 調査面積

80m²

(5) 調査担当者

松江市教育委員会 社会教育課 文化係長 岡崎雄二郎

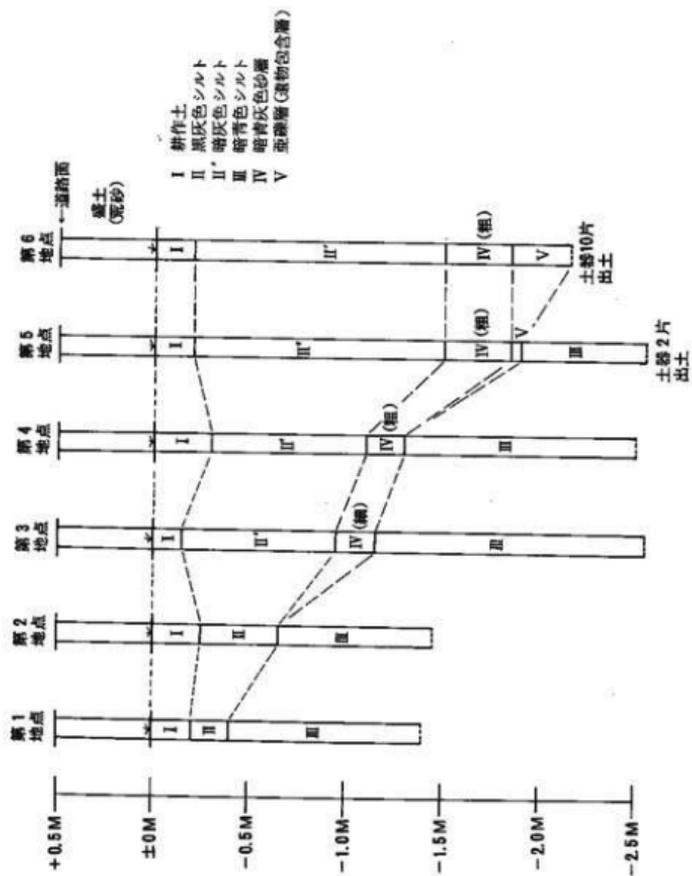
(6) 調査の概要

5号水路の調査

第1調査区～第4調査区

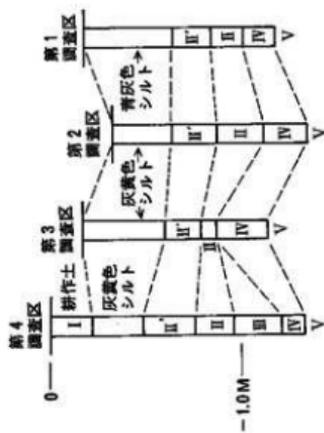
現在の上水路の下部は灰色粘土層となり、その下部には木の枝や葉、流木などの有機質を多く含む腐葉土が10～60cmの厚みで堆積していた。この腐葉土層は、道路を隔てた30街区の調査区でも砂層の上面に厚さ1～2cmの薄層として認められ一連のものと考えられる。

腐葉土層の下は砂質土またはシルト土層で上層部には第3調査区から薄い粗砂層が西方へ向けて含まれており、土師器片2片の他、黒曜石片1個を包含していたのみであった。したがって5号水路部分は本調査に至らなかった。

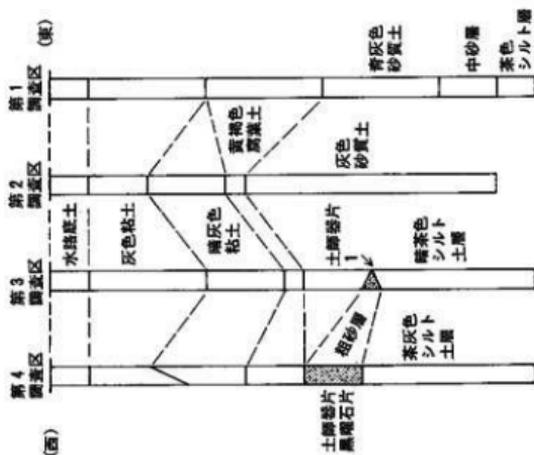


第6図 5号水路西部試掘箇所土層柱状図

5号水路(中央部)



5号水路(東部)



第7図 5号水路中央部、東部試験箇所土層柱状図

3. 都市計画道路3・4・27号線（上迫子笠無線）の調査

(1) 調査にかかる土地の地番

松江市西川津町地内の河川，堤塘

(2) 調査にかかる土地の所有者

松江圏都市計画事業北部土地区画整理事業施行者松江市

(3) 調査期間

着手 昭和63年12月15日

完了 昭和63年12月23日

(4) 調査面積

$18 \times 19\text{m} = 342\text{m}^2$

(5) 調査担当者

松江市教育委員会 社会教育課 文化財係主事 吾郷雄二

(6) 調査の概要

都市計画道路3・4・27号線は，区画整理事業区域内の南北を縦貫する主要な幹線道路となるため，その建設が急がれたが，朝酌川の本流から西南へ分岐した支流を通過するため，埋め立てられることになった。

従前の道路の調査では，この部分は未調査であったが，すぐ南の交差点一帯ではかなり密に遺物の出土が認められていたので，河川敷底部の重機掘削工事の際，立ち会うこととした。

その結果，土器片などは殆ど出土しなかったが，砂層中からヒトの頭蓋骨他の骨片が出土したので，平成元年12月1日に鳥取大学医学部法医学教室の井上晃孝助教授に人骨の鑑定を依頼した。

以下，鑑定所見を記す。

鑑 定 所 見

松江タテチヨウ遺跡出土品

資料1 頭蓋骨と下顎骨

形態学的に明白に人骨である。

- 1) 性別：男性
- 2) 年齢推定：30～40歳位（壮年）

3) 死後経過時間の推定：400年位

恐らく松江地方の古史によれば、戦国時代永禄6年（1563年）の尼子と毛利勢の合戦による戦死者と推定される。頭蓋骨に鋭利な切創（刃傷）が多数認められ、致命的切創である。

切創1) 頭頂部～前頭部（右眼窩上縁）に至る全長12.5cm、創底は頭蓋内板まで切断

切創2) 左側頭面

2箇所に頭蓋内板に達する切断創

切創3) 右側頭面

1箇所同様に頭蓋内板に達する切断創

切創4) 後頭面

後頭中央部に頭蓋内板に達する切創

その他、中、小の切創多数を認める。

資料2 獣骨 4個

1) 成獣（鹿類）骨 3個

左踵骨、左距骨（左足骨）

肋骨片

2) 幼獣（鹿類）骨 1個

左脛骨（下肢骨）

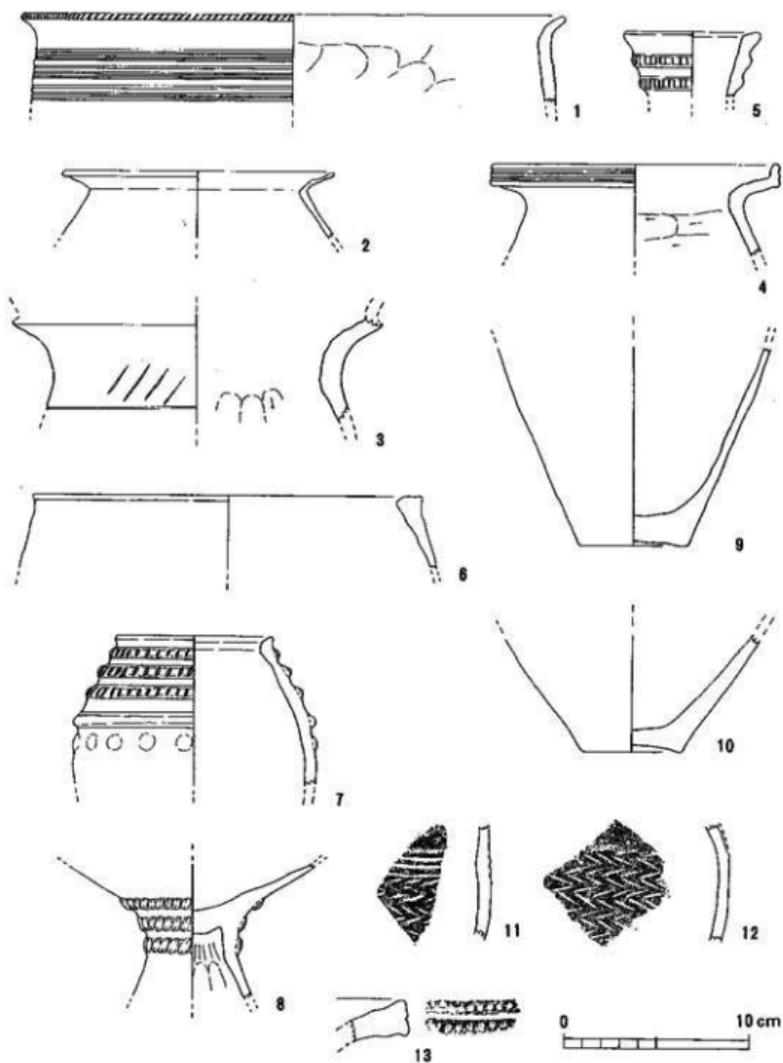
資料3 不明のもの 1個

文献 井上晃孝，他：中世戦国時代の2つの頭骨にみられた刀傷，法医学の実際と研究，33，305-309，1990

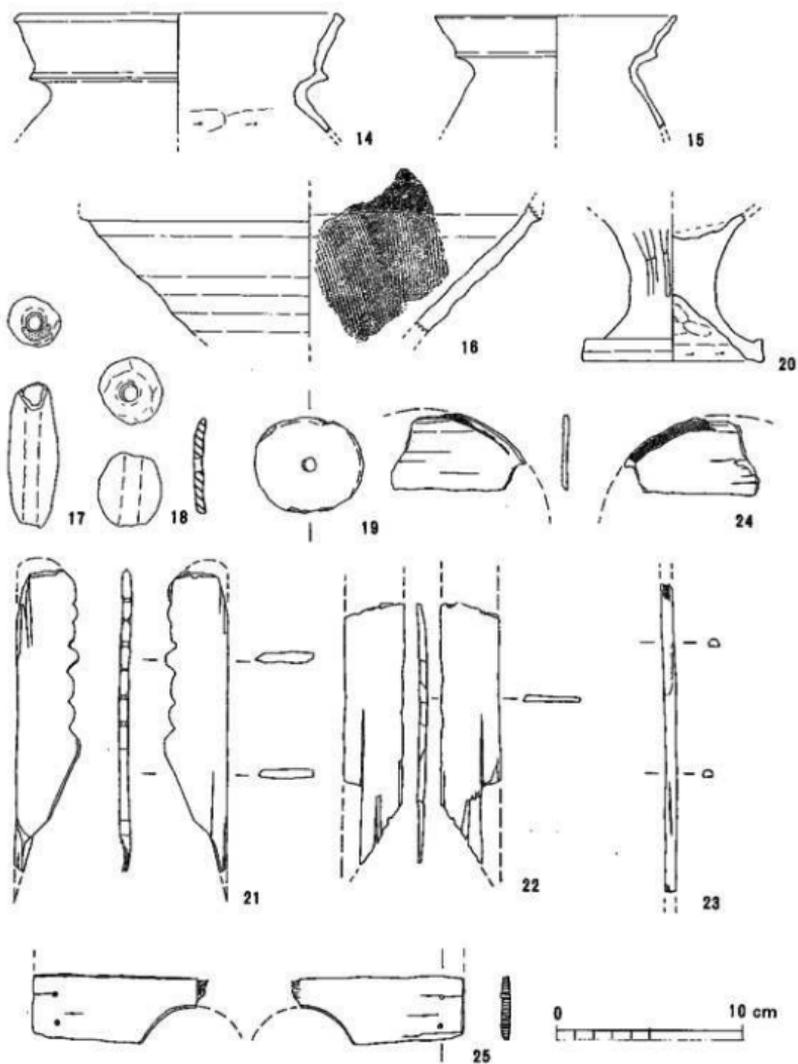
鳥取県米子市西町86番地

鳥取大学医学部法医学教室

助教授 井上晃孝



第8图 上追子笠無縁出土遺物実測図



第9圖 上道子豆無輪出土遺物実測図

4. 30街区の調査

(1) 調査にかかる土地の地番

松江市西川津町北工区30街区1, 2, 4, 5-1, 5-2, 5-3, 6-1, 6-2

(2) 調査にかかる土地の所有者の氏名

久保田俊己, 野津幹雄, 有限会社豊和不動産

(3) 調査期間

着手 平成元年12月8日

完了 平成元年12月9日

(4) 調査面積

5×5mのグリッドを5箇所設定。計125m²

(5) 調査担当者

松江市教育委員会 社会教育課 文化係長 岡崎雄二郎

(6) 調査の概要

第30街区, 第1調査区

第1層は, 灰色耕作土層で厚みは平均10cmを測る。第2層は厚み70cmの灰褐色粘土層である。第3層は厚み20cmほどの薄い褐色細砂層だが, 遺物は含まれていない。

その下層は厚み15~20cmの灰色粗砂層となっており小礫を若干含んでいる。この土層には, 縄文土器片, 弥生土器片, 須恵器片を含んでいた。この遺物包含層は厚み2mの暗黄灰色シルト土層となっており, アシなどの湿地性植物を含んでいた。2m以下は, 基本的に土層は変わらないが, 二枚貝などの貝殻や樹木の枝片を含んでいる。

第2調査区

耕作土が10cmの厚みであり, 第2層は褐色~暗灰色の粘土層が70~75cmの厚みで堆積している。第3層は暗青灰色の細砂層で厚みは25~30cm, 樹木の枝片などの有機質を多く含んでいる。第4層は暗褐色の粗砂層で厚みは10~15cm, 弥生土器片を少量含んでいる。この遺物包含層の下層は厚み2mにわたり暗黄灰色シルト質土層となっており, 2m以下は土層は変化しないが貝殻や木枝片を含んでいる。

第3調査区

耕作土層が10cm平均あり, 第2層は暗褐色粘土質土層で厚みは70cmある。第3層は青灰色細砂層で厚み10~20cmを測る。第4層は暗青灰色の砂礫層で厚み10cmを測る。弥生土器を若干含んでいる。第5層は暗黄灰色シルト土層で厚みは2m以上を測る。下層において

貝殻などは含んでいない。

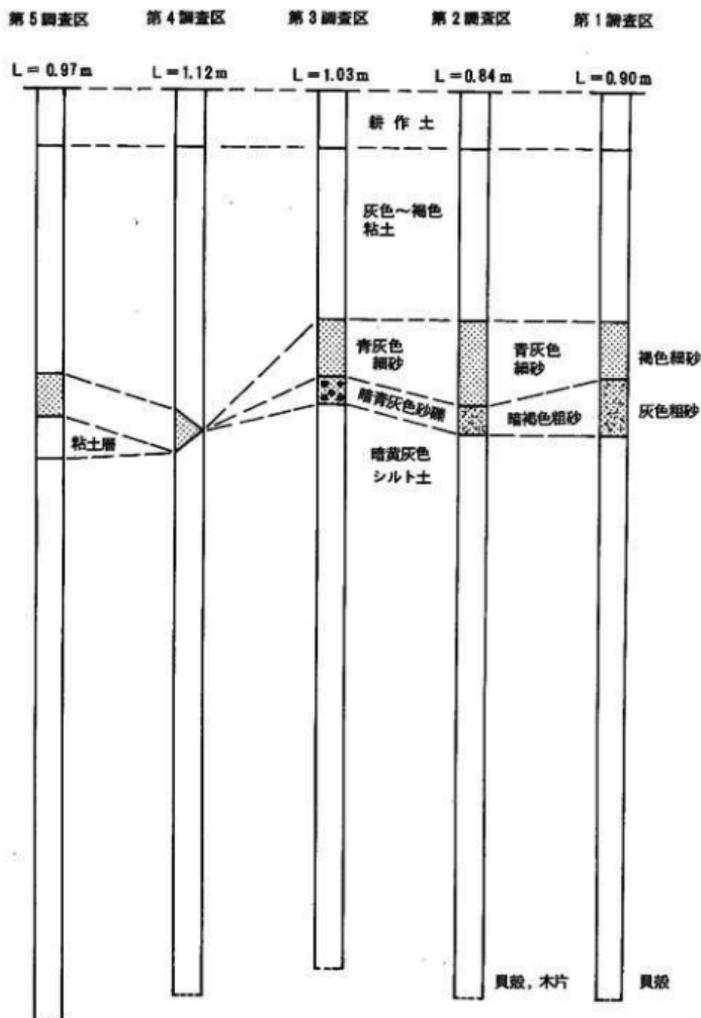
第4調査区

耕作土層が10cmあり、第2層は110cmの厚みで暗褐色粘質土層が堆積しているが、第3層との中間に部分的に厚み15cmの砂層を含んでいる。第4層は暗灰色シルト質土層で部分的に砂質土層となっている。厚みは2mまで確認したが変化はない。下層において貝殻などは含んでいない。

第5調査区

耕作土層が厚み10cm平均ある。第2層は粘土質土層で厚み90cmを測る。第3層は厚み15cmの砂層、第4層は厚み15cmの粘土層、第5層は厚み2m以上のシルト質土層で貝殻などは含んでいない。

調査の結果、遺物包含層を確認したのは第1、2、3調査区で、第4、5調査区は無遺物層であった。出土遺物は土器片が大半で中でも弥生土器片が圧倒的に多い。破片はいずれも小片で形のわかるものはなかった。遺物が出土した範囲は、第1～3調査区周辺で、いずれも開発区域内の北側に集中している。遺物はいずれも小片で摩滅しており、しかも各調査区で20～50片程度であり、旧河川の中心部ではなく、もともと沼地のようなところである時期（平安時代）に河川が氾濫し砂礫と共に上流から押し流されてきた遺物が堆積したものである。



第10图 30街区土层柱状图

5. 34街区の調査

(1) 調査にかかる土地の地番

松江市西川津町1109-1, 1109-2, 1110, 1216, 1364-1, 1364-4, 1367

(2) 調査にかかる土地所有者の氏名及び住所

久保田俊己, 久保田喜雄, 村上森吉, 安達信子, 奥名義千代

(3) 調査期間

着手 平成2年1月31日

完了 平成2年2月16日

(4) 調査面積

722m²

(5) 調査担当者

松江市教育委員会 社会教育課 文化係長 岡崎雄二郎

(6) 調査の概要

34街区の調査

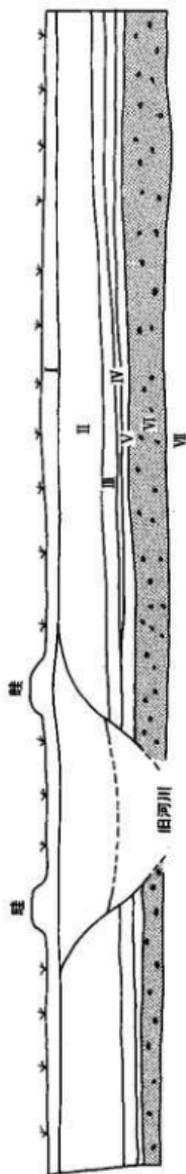
朝酌川河川敷のすぐ西側に隣接する街区である。旧状は朝酌川本流から南西に支流が分岐する地域で北方からも小運河がその支流に合流している。この小運河はいつ頃か埋め立てられ調査前は細長い水田地となっていた。また支流も昭和63年度において既に埋め立てられていた。

調査はまず支流を除く全域に一辺5m前後の試掘グリッドを設け遺物包含層の有無を確認した。水田下の土層はおおむね耕作土層(厚み25cm), 灰色粘土層(厚み0.75~1.5m), 砂礫層(厚み0.5~1.25m), シルト質細砂層またはシルト土層となっている。砂層は場所によって上部が粗砂, 下部が細砂となっている。遺物包含層は, この内砂層及び砂礫層である。砂層は灰色~淡黄色を呈し, 粗砂は直径2~5mm, 細砂は直径1mm以下の砂で構成されている。砂は粗砂である。

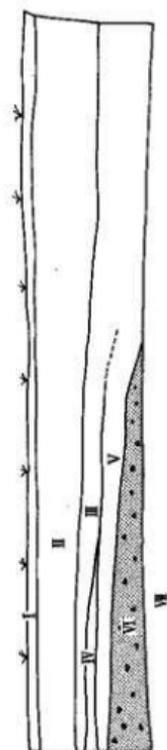
遺物は土器片が大半であって, 他に石器, 土錘, 分銅型土製品, 管玉加工用原石, 黒曜石製石鏃, 石器, 黒曜石片が認められる。土器片は縄文時代晩期, 弥生時代(前期, 中期, 後期), 古墳時代前期, 奈良, 平安期の須恵器片が認められる。土器片などは, 時間的にへだたりがあるものが混在して同じ土層から出土しており, 摩滅した破片が多く含まれていることなどから, 出土土器の示す最も新しい時期である西暦9世紀代に朝酌川流域が大規模な洪水に見舞われ, 中流の河川周辺集落が流出し河口付近に砂礫とともに堆積したの

ではないかと考えられる。試掘調査の結果、1, 2, 3, 6, 11, 13, 14, 15の各調査区で遺物包含層が確認されたが、2, 3を除く調査区では土器片が10~30片程度と少なく、しかも大型の破片は少なかった。一方第2, 3の調査区では、それぞれ200~300片採集でき、しかも大型片や器形の分かるものも多く、かなり大量に包含されていることが分かった。そこで第2, 3の調査区を中心に4, 7, 11, 6, 15の各調査区の状況を勘案して、調査区域の拡張を図り、さらに調査を進めた。

その拡張区は東西28m, 南北19m, 計532m²であり、その他の調査面積190m²を加えると34街区での調査面積は合わせて722m²となった。



北壁断面図

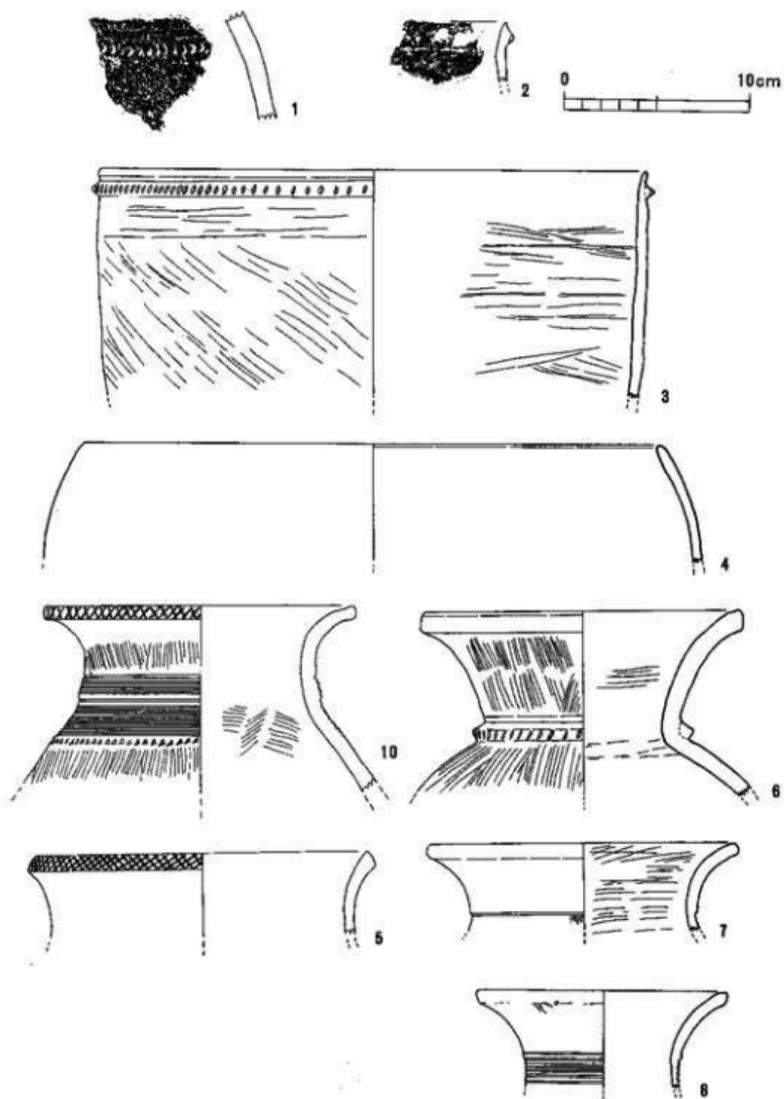


東壁断面図

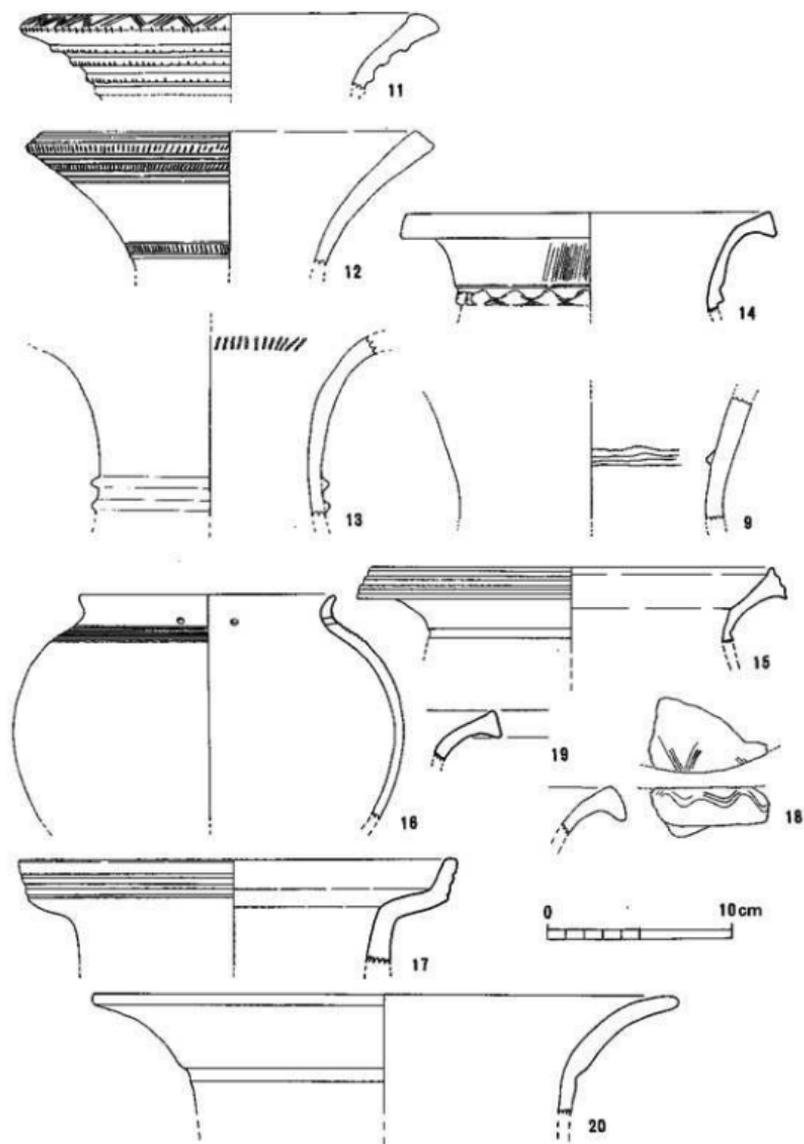


- 第I層 耕作土
- 第II層 灰色粘土
- 第III層 黄褐色粘土
- 第IV層 淡黄色粗砂
- 第V層 淡黄色细砂
- 第VI層 暗褐色砂礫(運物包含層)
- 第VII層 茶色シルト土

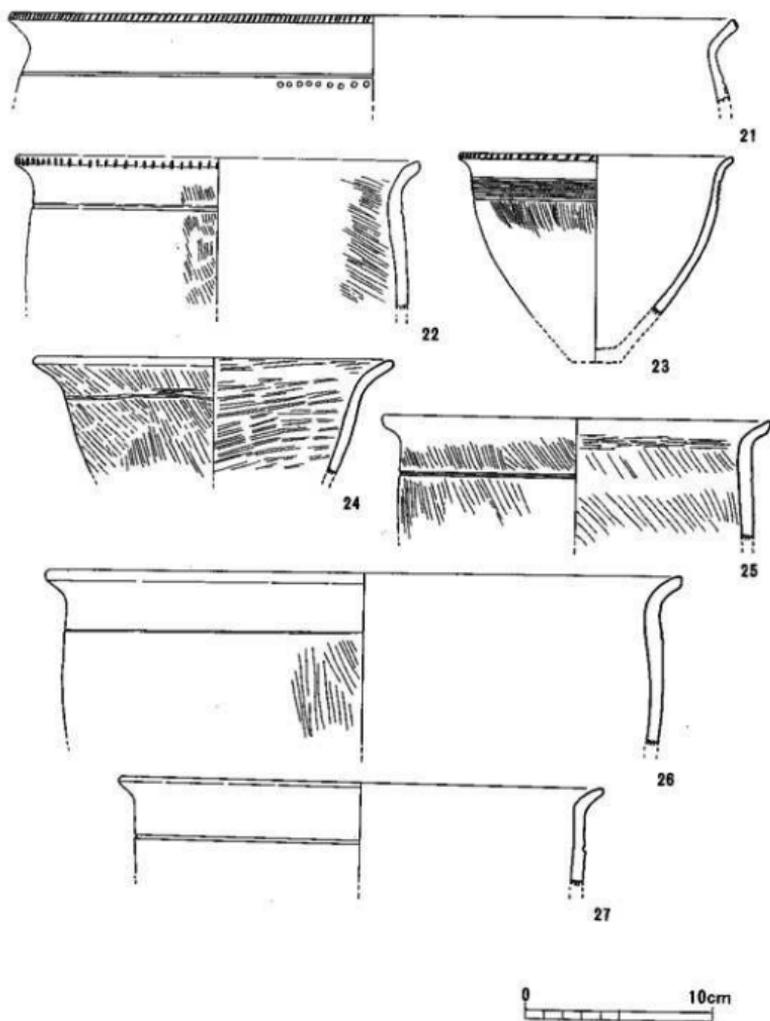
第11図 34街区土層断面図



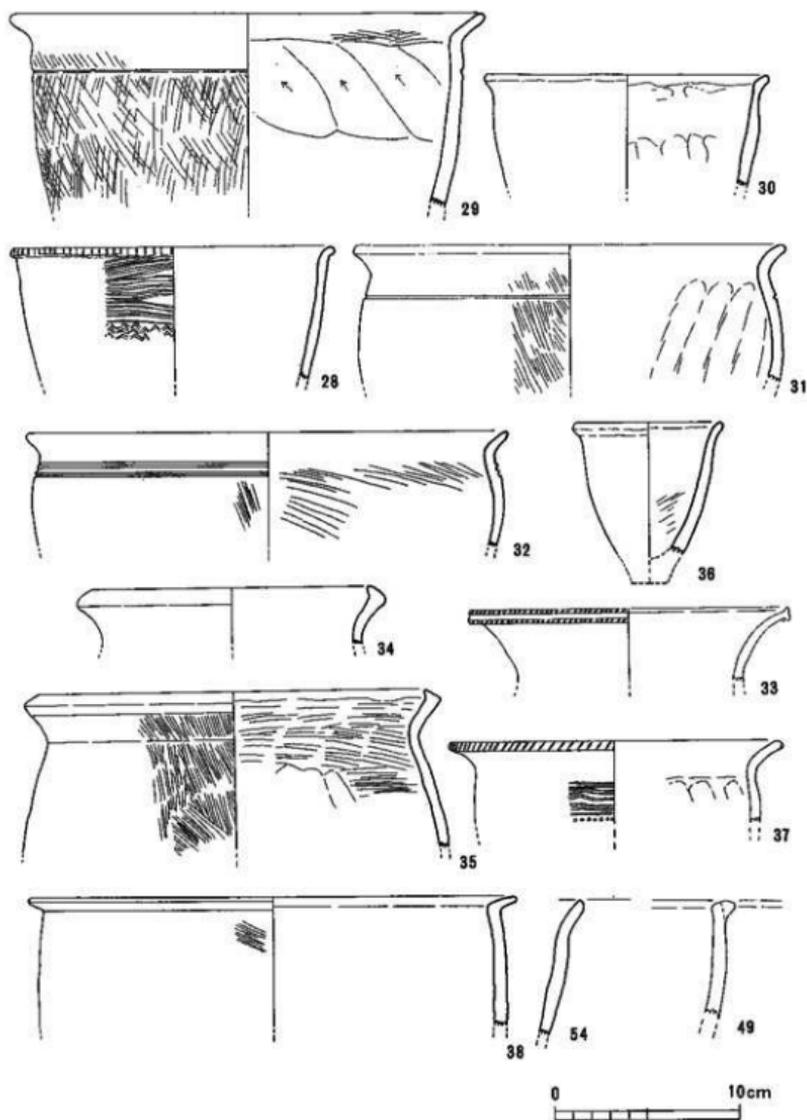
第12图 34街区出土文物实测图①



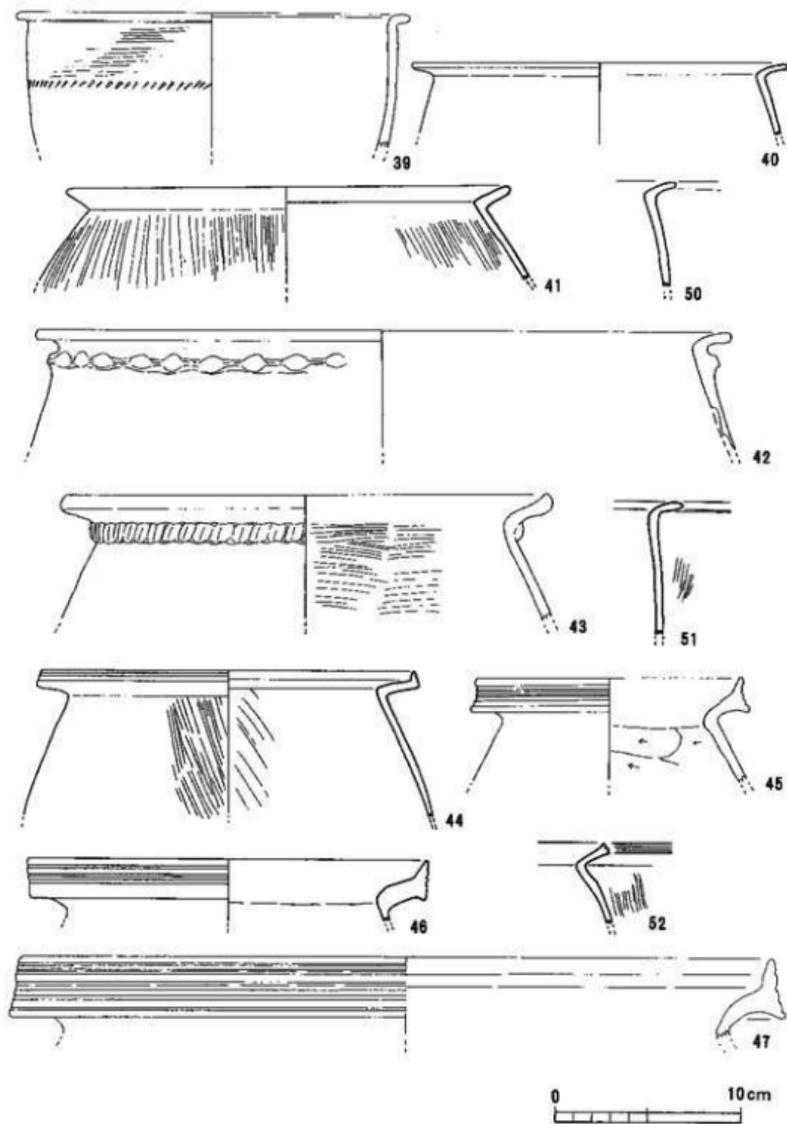
第13图 34街区出土遗物实测图②



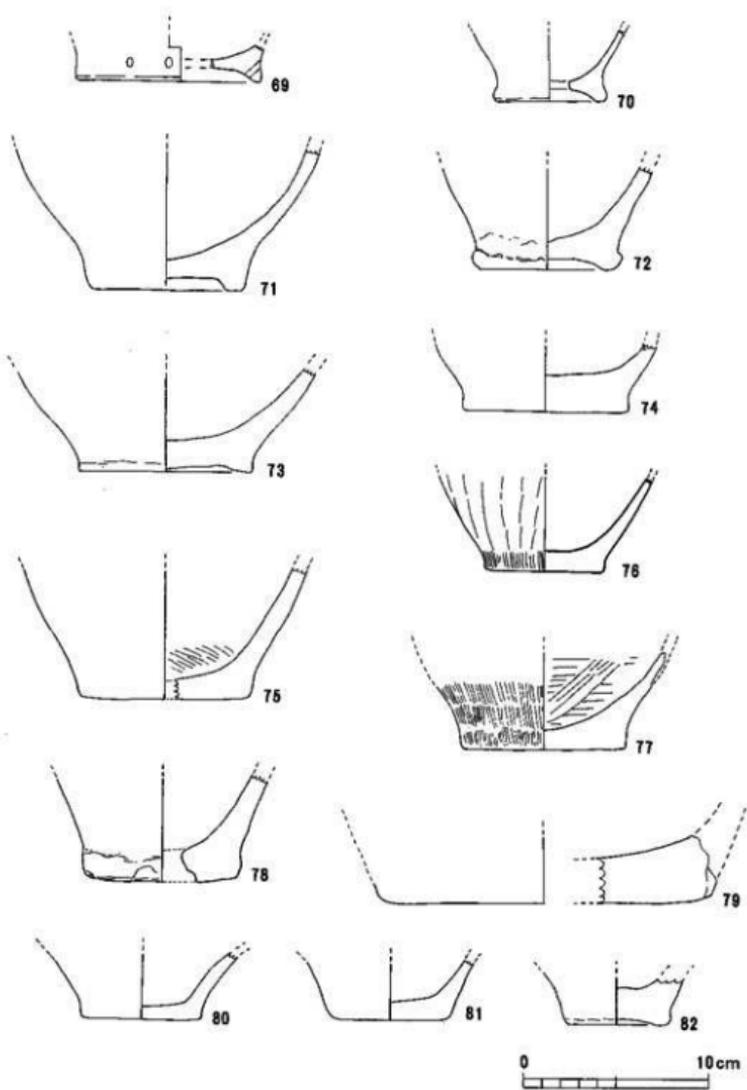
第14图 34街区出土遗物实测图③



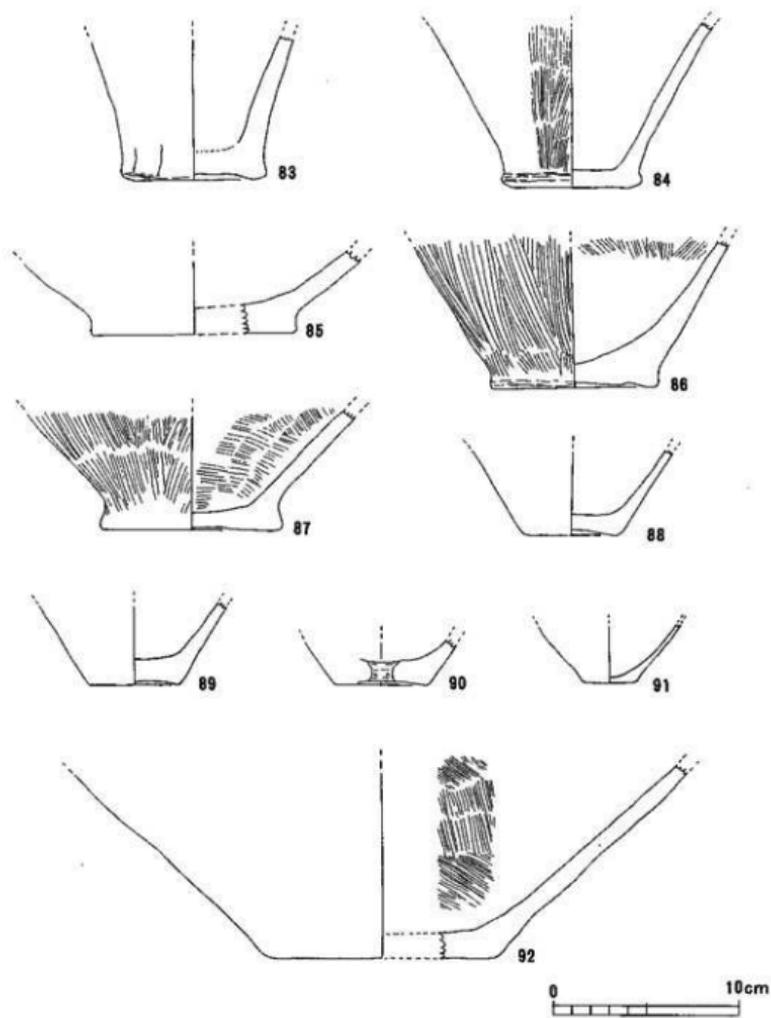
第15图 34街区出土遗物实测图④



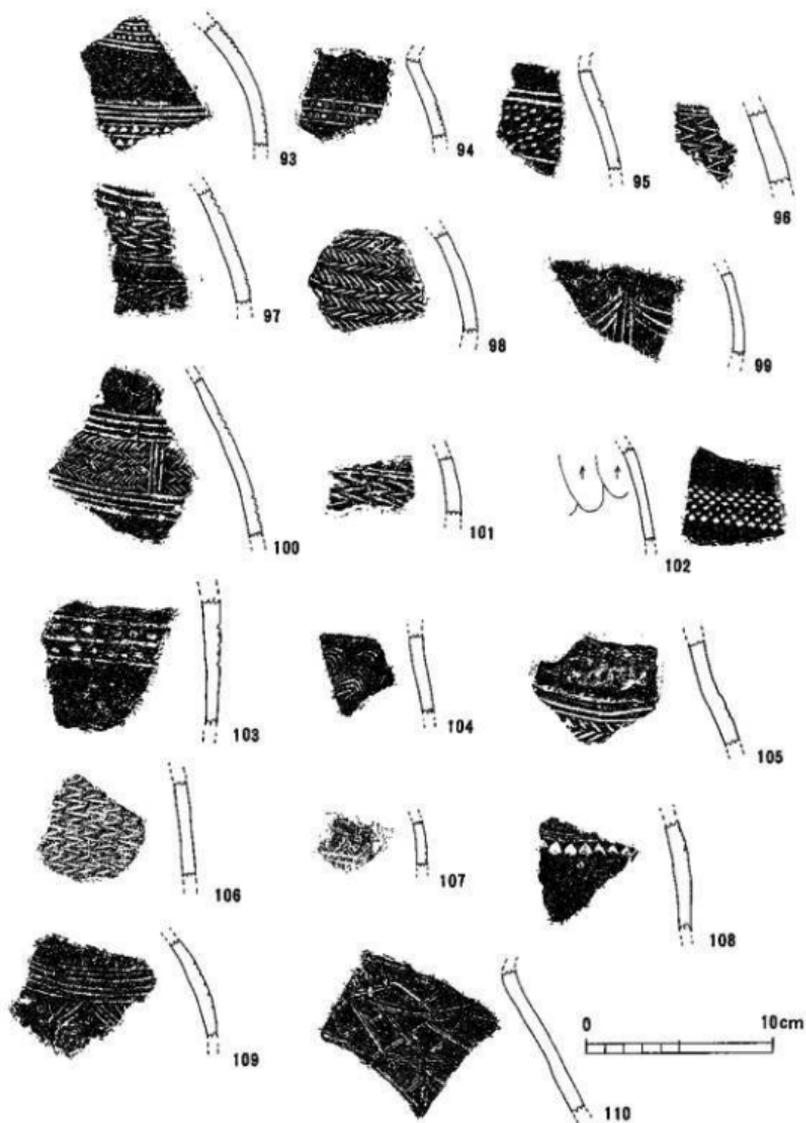
第16图 34街区出土遗物实测图⑤



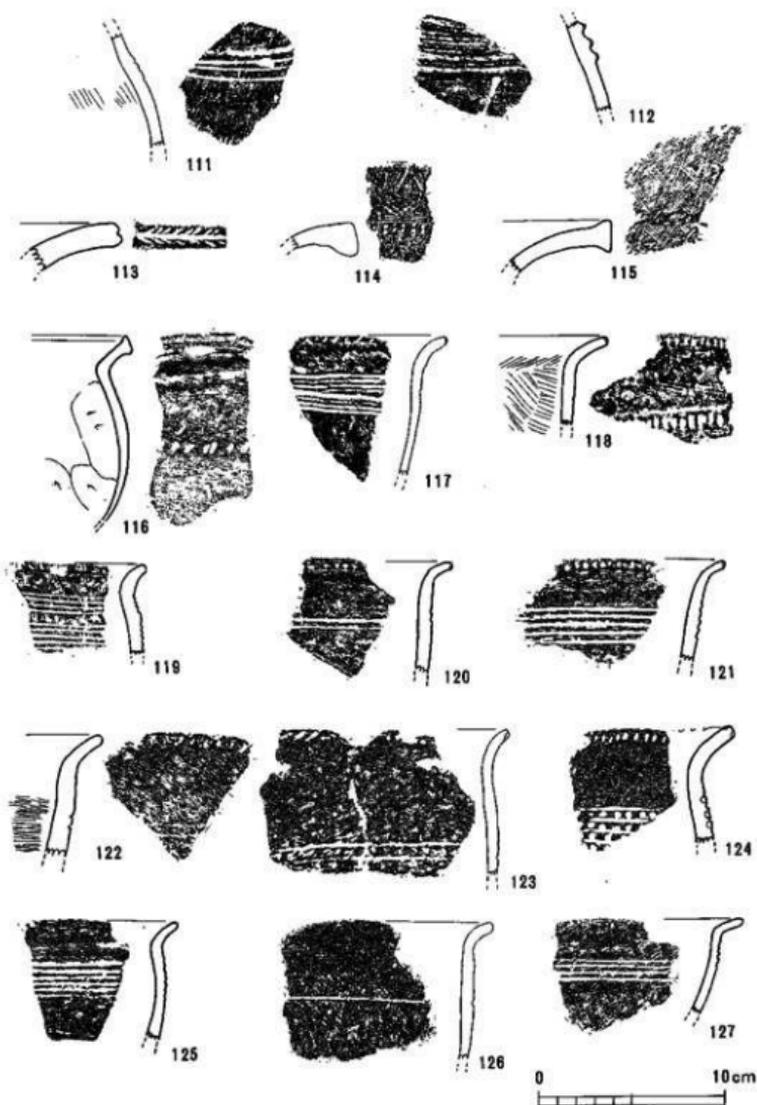
第18图 34街区出土器物实测图⑦



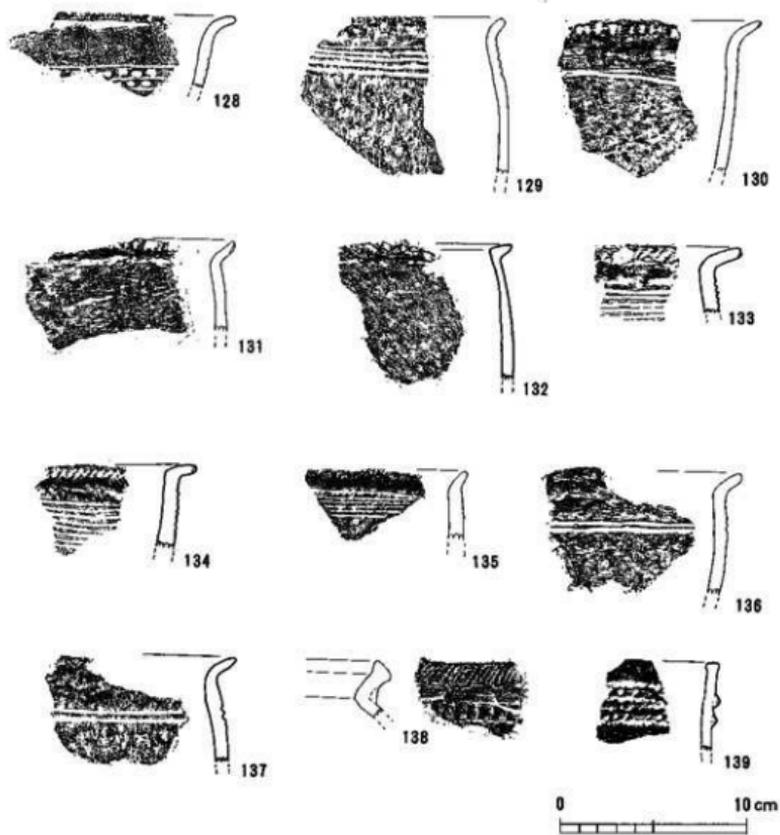
第19图 34街区出土遗物实测图④



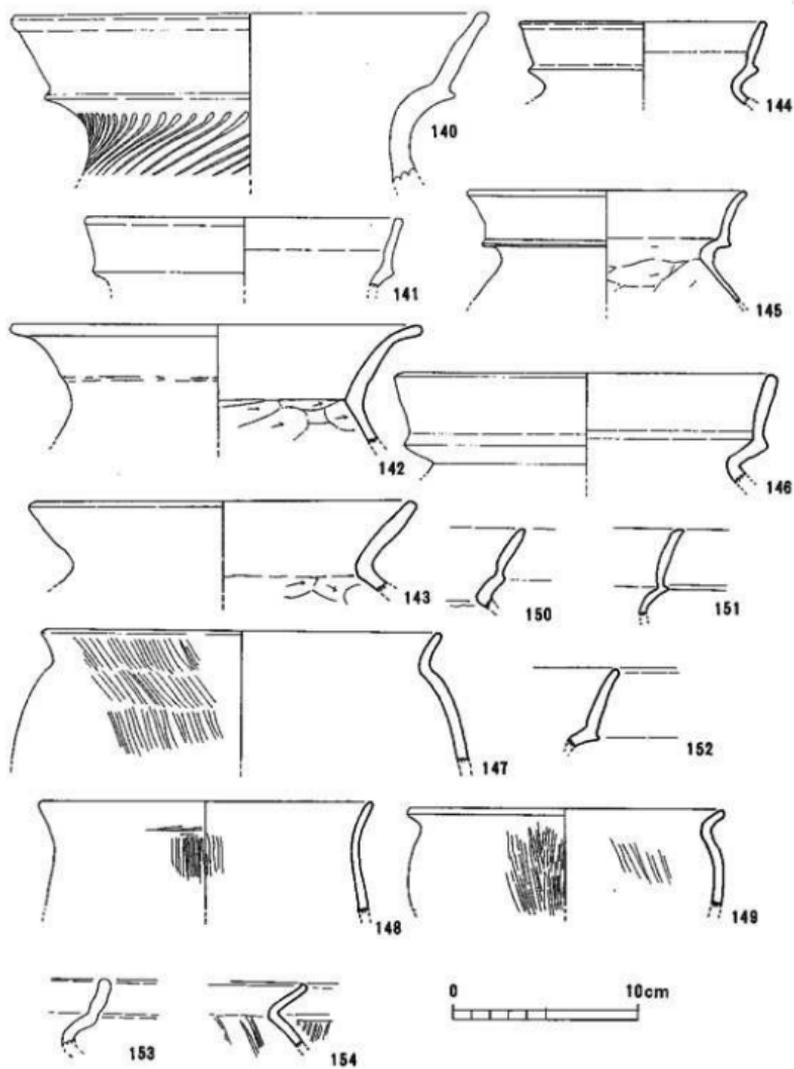
第20图 34街区出土遗物实测图⑨



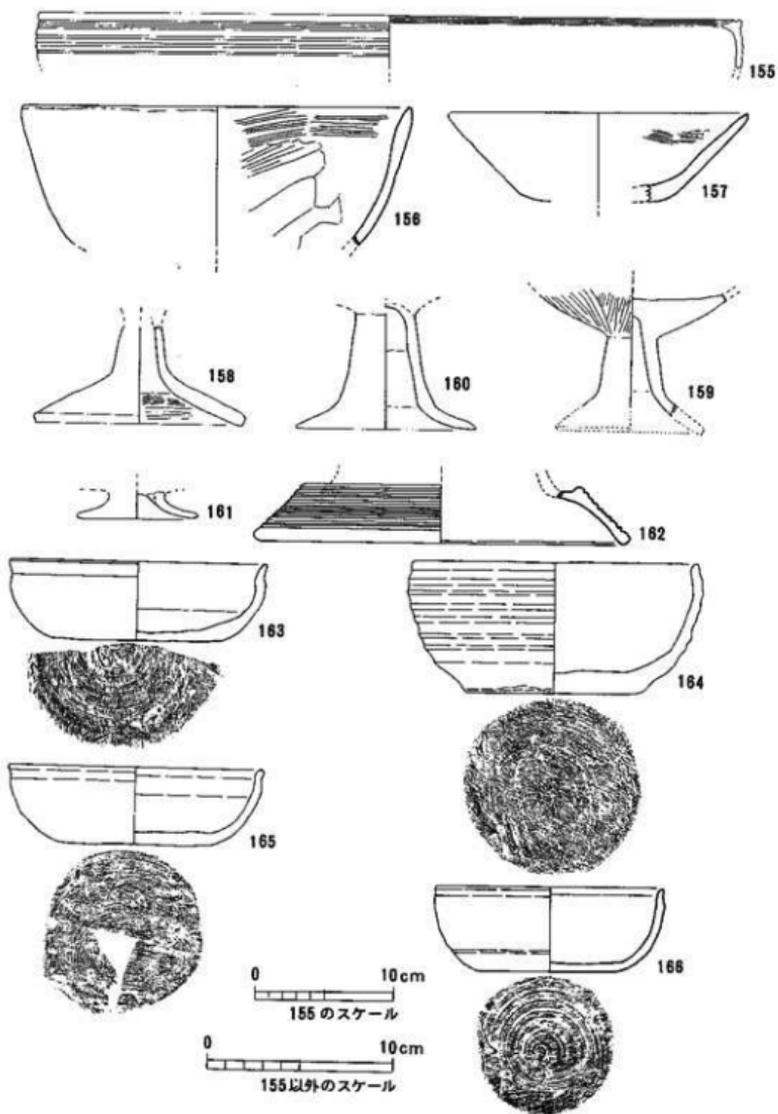
第21图 34街区出土遗物实测图⑬



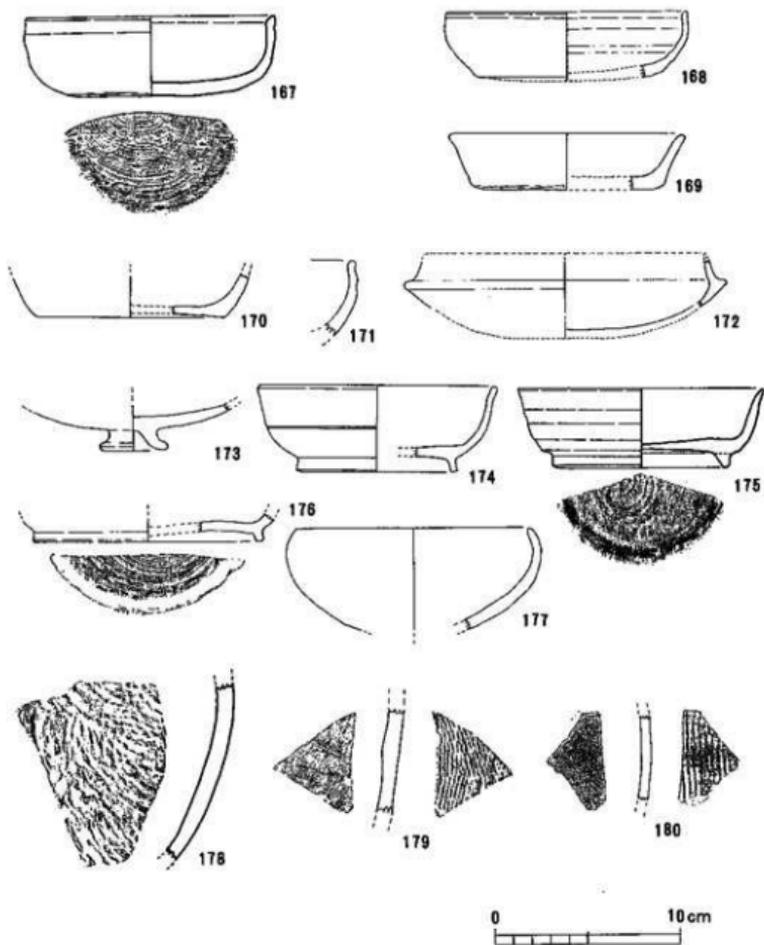
第22图 34街区出土遗物实测图①



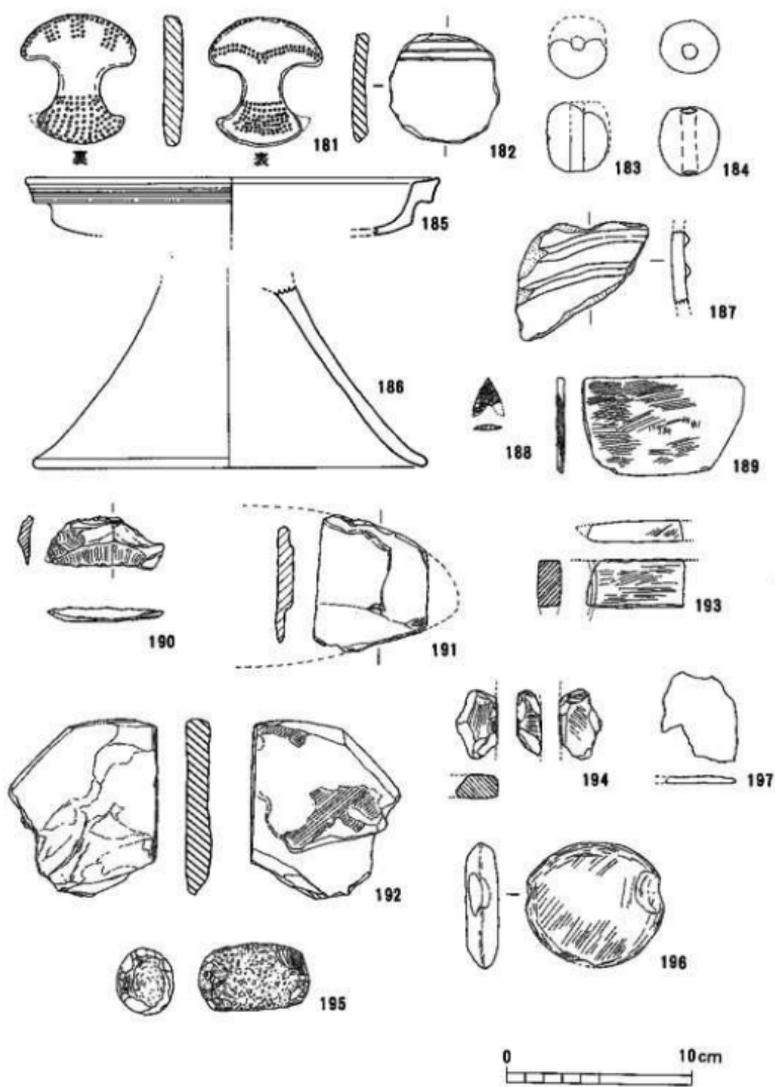
第23图 34街区出土物实测图①



第24図 34街区出土遺物実測図⑬



第25图 34街区出土器物实测图④



第26图 34街区出土遗物实测图⑬

6. 33街区5-2番の調査

(1) 調査にかかる土地の地番

松江市西川津町旧番地1118-1, 1119, 1120-1

(2) 調査にかかる土地の所有者の氏名及び住所

村上森吉, 松江市西川津町2666番地

(3) 調査期間

着手 平成元年9月4日

完了 平成元年9月5日

(4) 調査面積

$11.25 \times 6.5 = 73\text{m}^2$

(5) 調査担当者

松江市教育委員会 社会教育課 文化係長 岡崎雄二郎

(6) 調査の概要

既に旧水田面の上に、厚さ1.5mの盛土が施されていた関係から遺物包含層の上層までは重機による掘削とした。

旧水田面以下は、耕作土層厚み10cm, 灰色粘土層厚み40cm, 暗灰色～黒灰色粘土層厚み50cm, 灰色砂礫層厚み20cmを測る。この灰色砂礫層が遺物包含層であった。

包含層の下層は、淡灰色の細砂層と灰色シルト土層の互層となり、深さ1.5mまで掘り下げたが、土層の変化は認められず遺物も含まれていなかった。従って、調査は包含層である砂礫層を中心に精査した。砂礫層は厚み20cm前後で大きな転石は全くなく、直径15cm以下の礫が20%含まれていた。調査区の南端で厚みを増して傾斜していく。遺構は全く認められなかった。

(7) 出土遺物の検討

ア. 縄文土器

弥生土器に比べると破片は少ない。晩期頃のものが多い。図示したものは口縁部を外側に肥厚させ突帯を設け、さらに7mm～1cm間隔で幅広の斜方向の刻目文を施したものである(1)。

イ. 弥生土器

数量的に最も多い。前期～後期までの破片があるが、概して前期の破片が多い。前期の土器には、肩部に貝殻腹縁で羽状文や平行線文を施した壺形土器(6)や胴部に浅い段を

付けた甕形土器（4）がある。その他、時期は不明だが壺または甕の底部や蓋もある（9, 11, 12）。

中期の土器では、口縁部が「く」字状に屈曲し、上部に肥厚した端部に斜め方向の刻み目を付ける。頸部には粘土紐を貼り付け、幅7～9mmの山形の断面をなす（7）。また中期後葉の土器としては胴部から口縁部にかけて「く」字状に屈折した上下方向に拡張した端部に3条の凹線文を付けるものがある（8）。

ウ. 古式土師器

低脚杯が1個認められる（13）。

エ. 須恵器

古墳時代後期の杯身の破片の他、奈良時代～平安時代の杯がある。いずれも底部を回転糸切り手法によって切り離している（14～16）。

オ. 石器

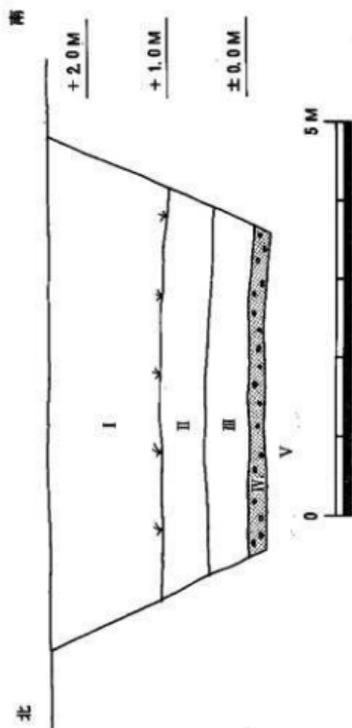
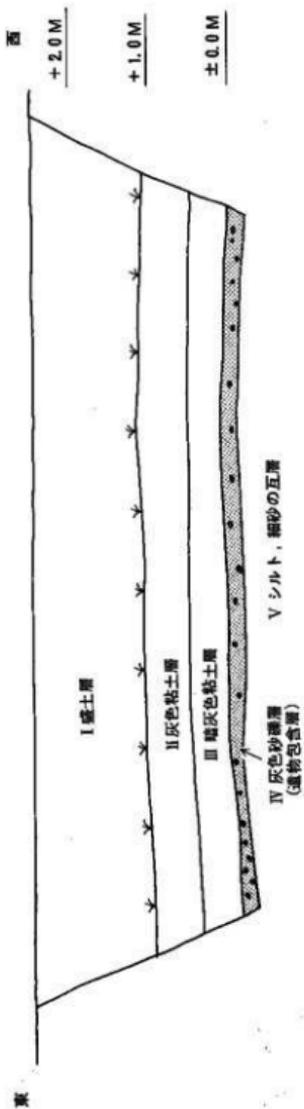
黒曜石の破片が8個ある。石器に加工した際の屑である。

カ. 木製品

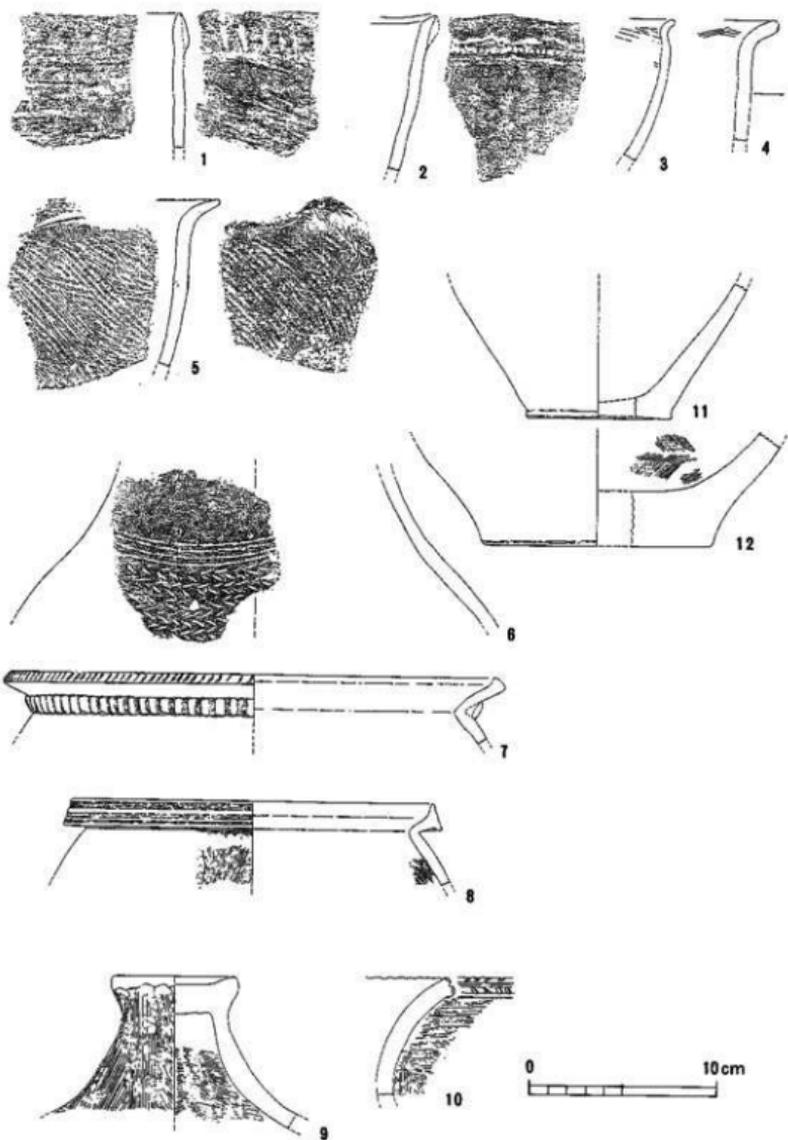
先端加工した木杭の他、製品は認められなかった。

キ. 自然遺物

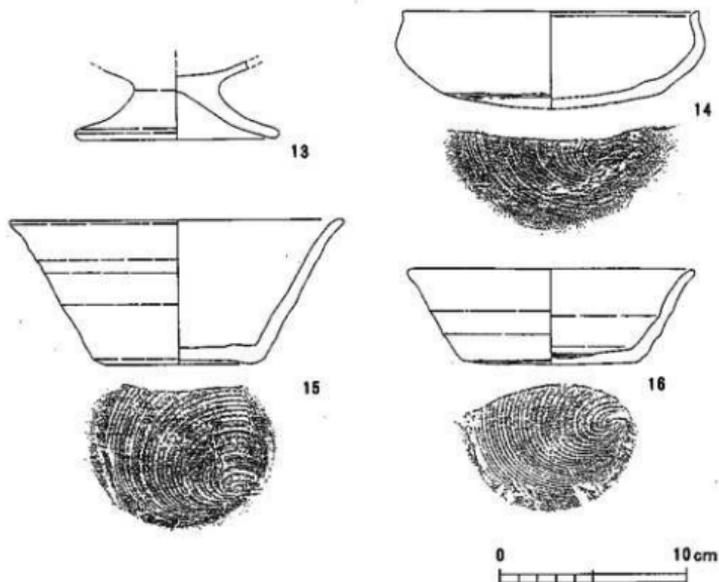
胡桃、栃、せんだんの実が認められる。



第27図 33街区5-2番土層断面図



第28图 33街区5-2番出土遗物实测图



第29图 33街区5-2番出土遺物実測図

7. 33街区4番の調査

(1) 調査にかかる土地の地番

松江市西川津町1123番地

(2) 調査にかかる土地の所有者の氏名および住所

土屋久美

(3) 調査期間

着手 平成2年2月23日

完了 平成2年2月28日

(4) 調査面積

$4 \times 4 = 16\text{m}^2$, $3 \text{箇所} \times 16\text{m}^2 = 48\text{m}^2$

(5) 調査担当者

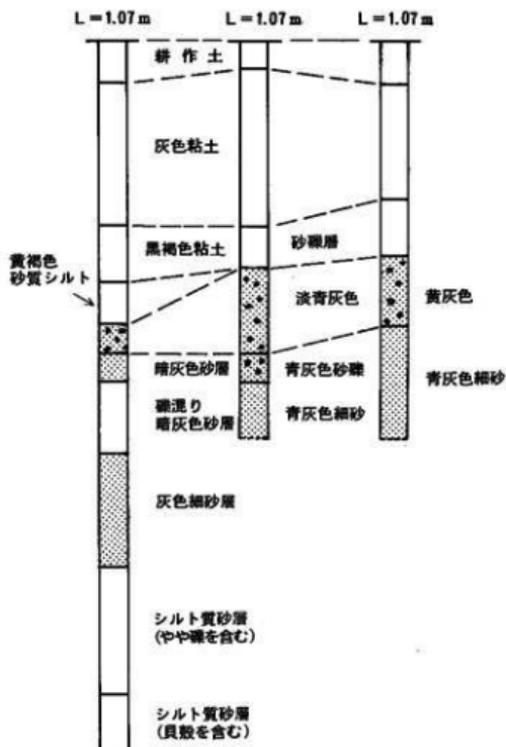
松江市教育委員会 社会教育課 文化財係長 岡崎雄二郎

(6) 調査の概要

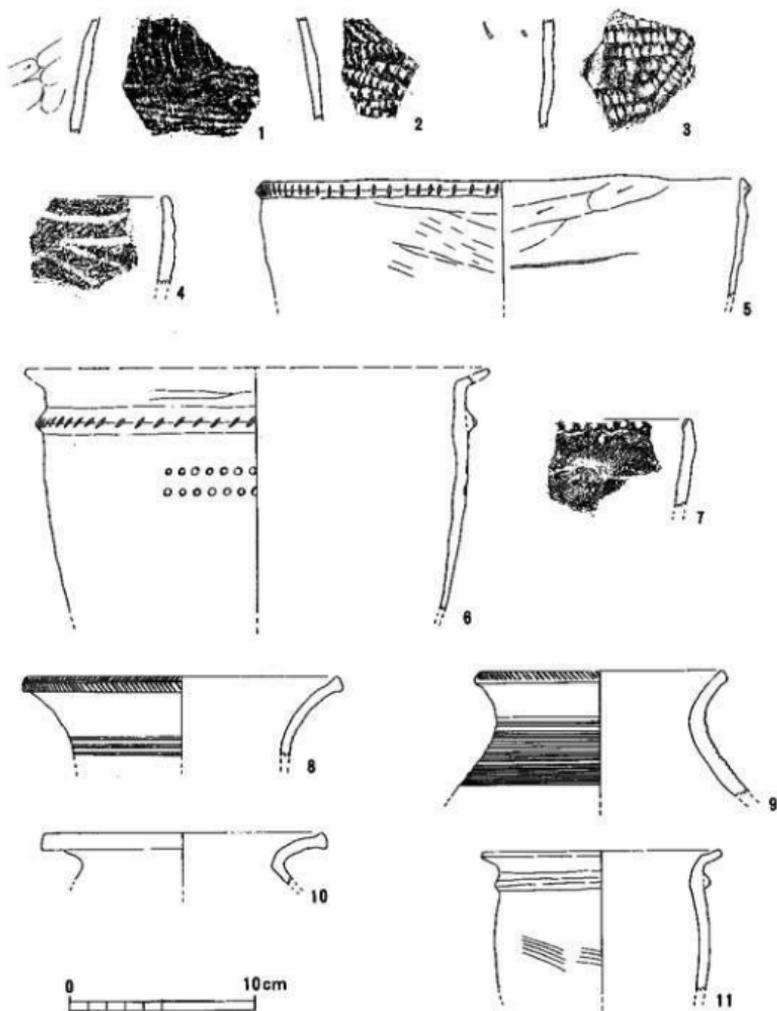
33街区の調査

調査区の南部、中央部、北部の3箇所において4m四方の試掘調査区を設定し、掘り下げた。北部の第1調査区では淡灰色砂礫層から遺物（土器片）が認められたが、上部界面付近に行くものの破片数は少なかった。以下は砂層、シルト質砂層と続き、最下層ではもろい貝殻片を多く含んでいた。中央の第2調査区では淡青灰色の砂礫層中の上位から15cm下方までの間で遺物（土器片）の出土が見られた。しかし破片は小片で少量であった。南部の第3調査区では黄灰色砂礫層中の上部から同様に若干の土器片が出土した。以上、33街区ではいずれも少量の土器片が出土しただけで本調査を実施するには至らなかった。

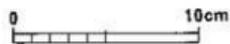
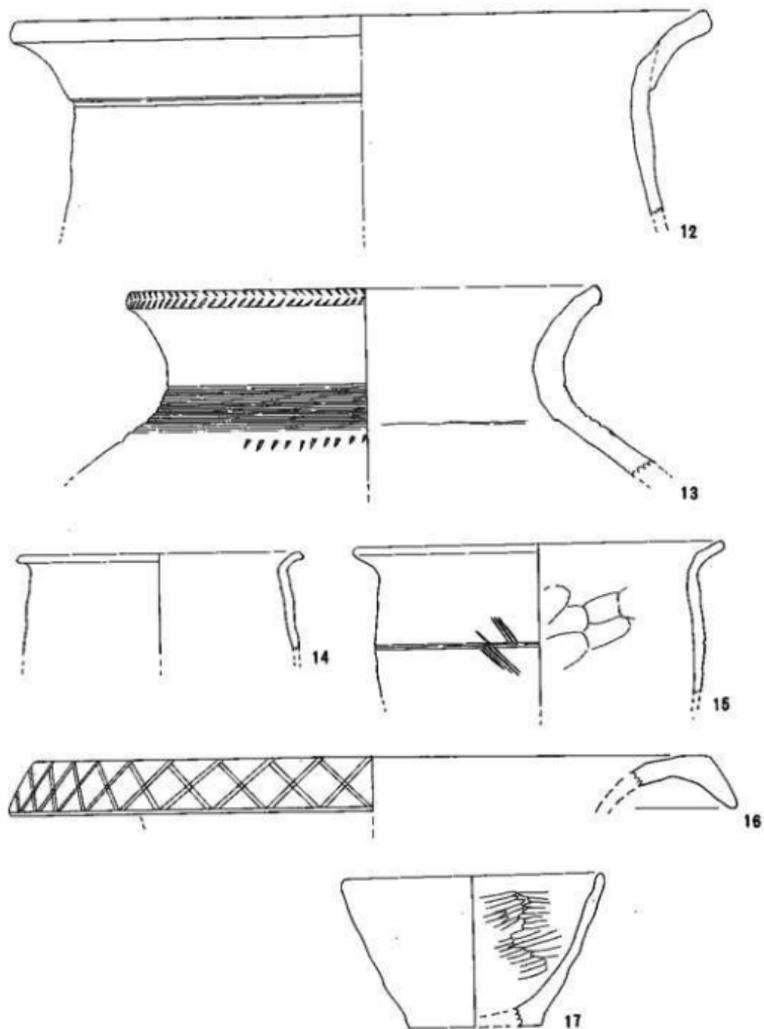
第2調査区 第3調査区



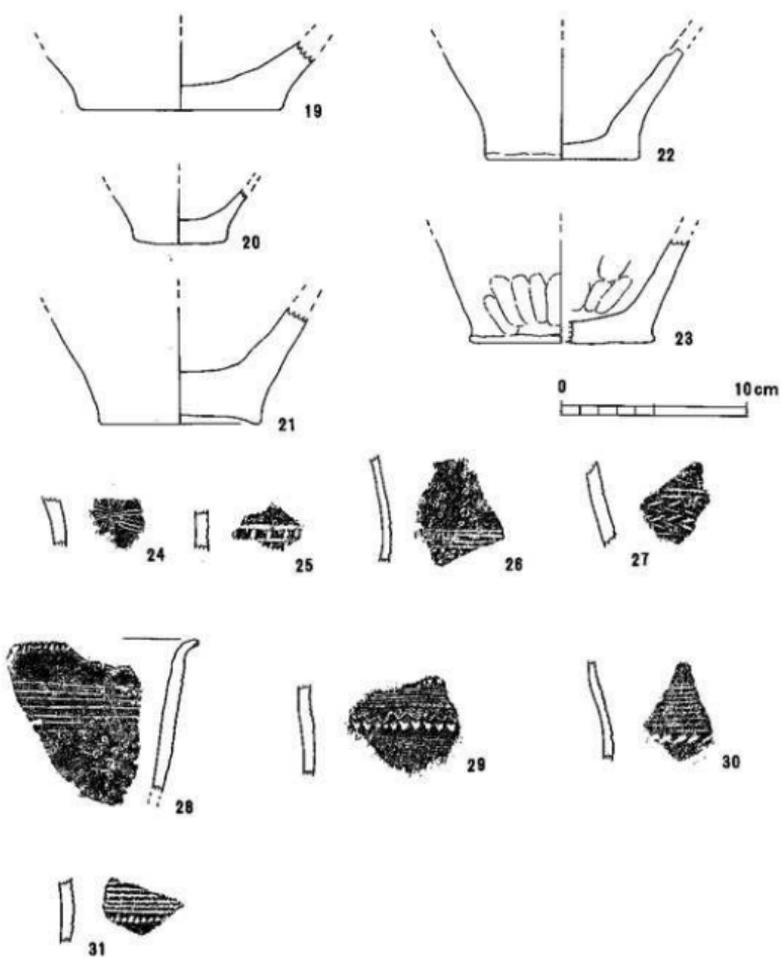
第30図 33街区4番土層柱状図



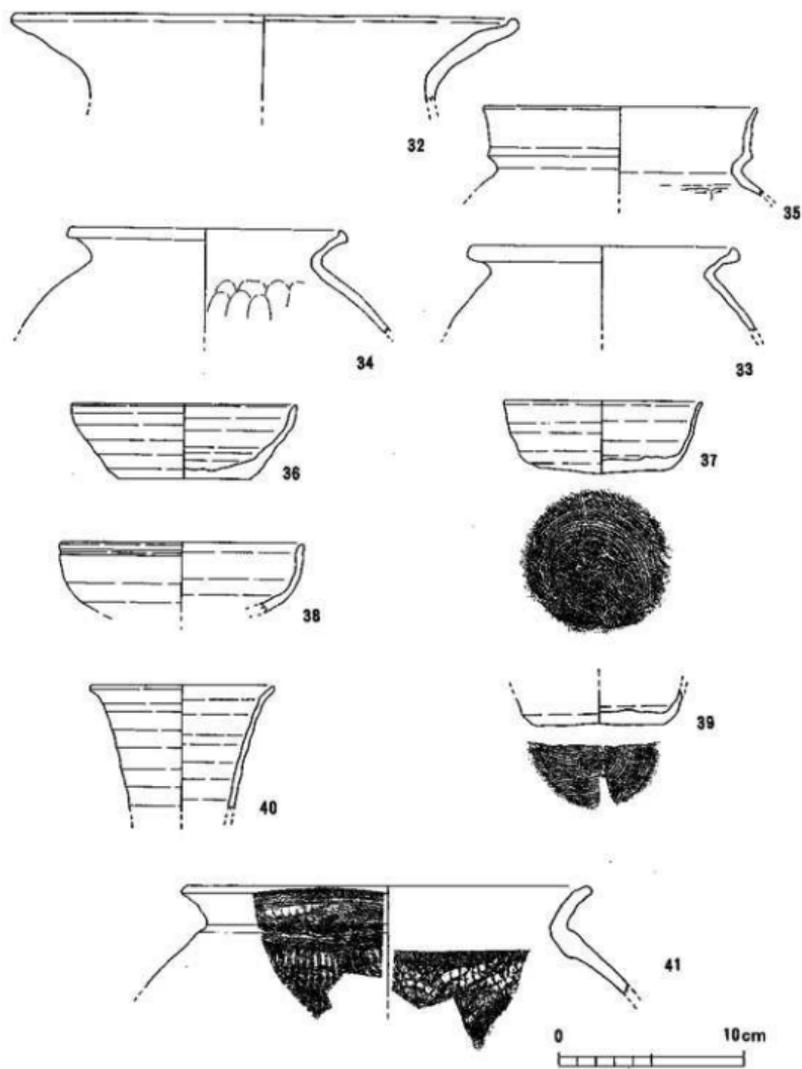
第31图 33街区出土器物实测图-1



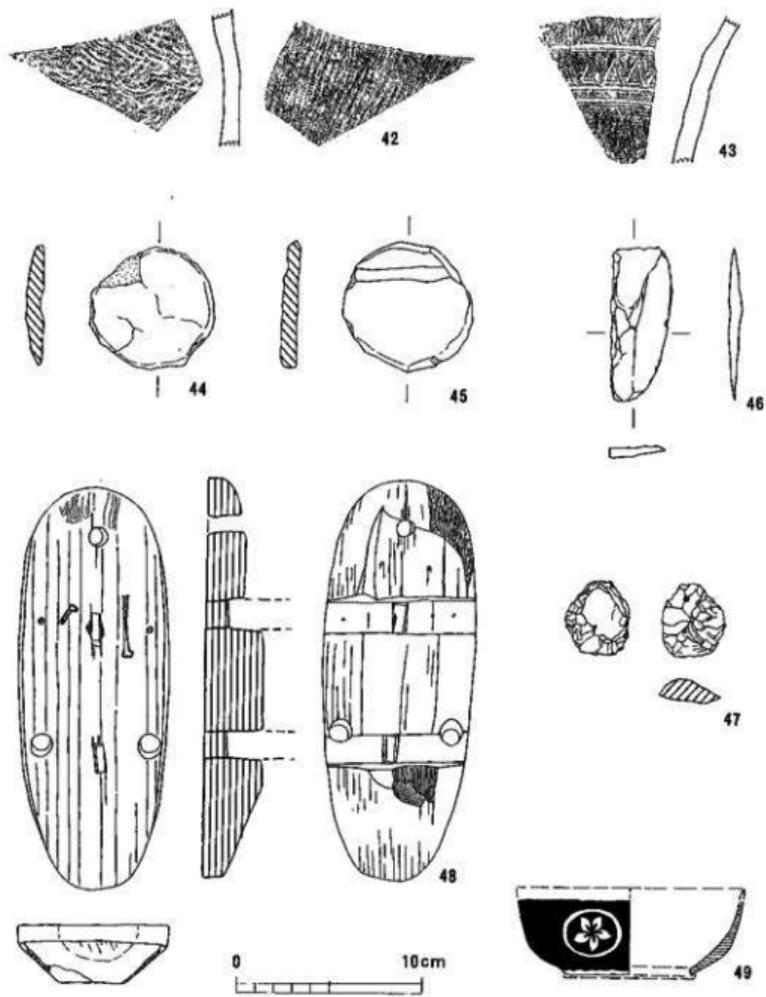
第32图 33街区出土文物实测图-2



第33图 33街区出土遗物实测图-3



第34图 33街区出土遗物实测图-4



第36图 33街区出土遗物实测图-5

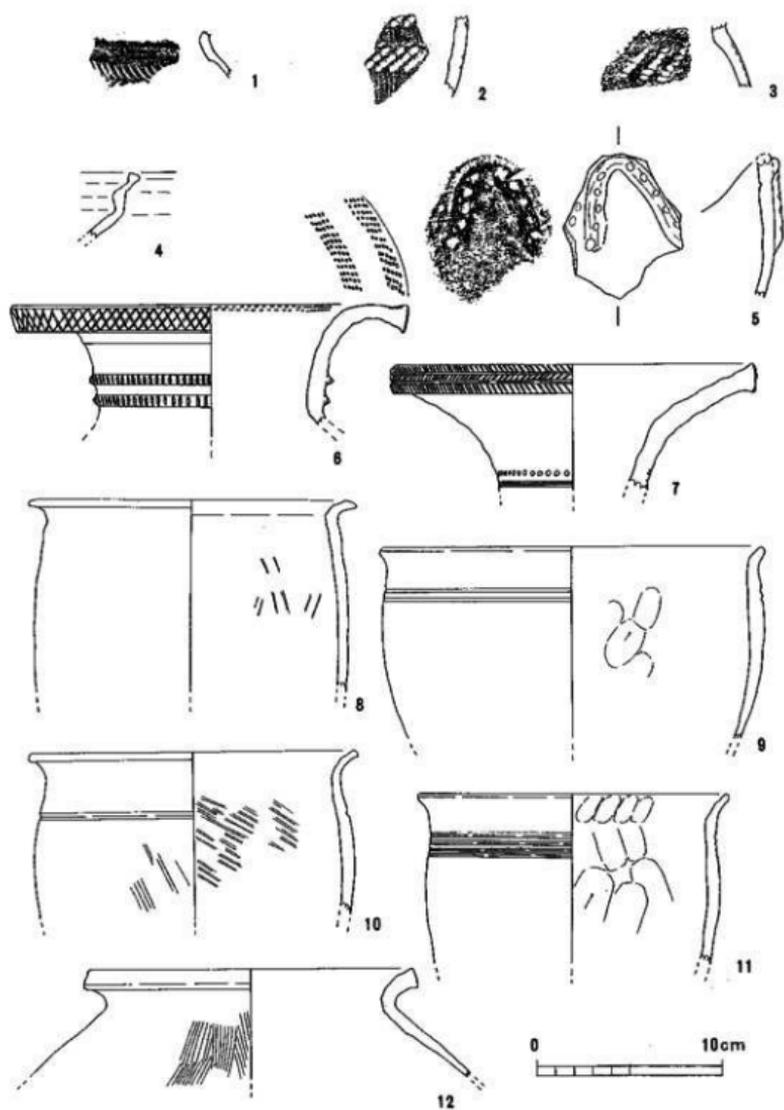
が大半であった。弥生土器の出土もあったが、ほとんど摩滅した破片であった。

その他、①区では砂礫層から局部磨製石鎌が検出された。

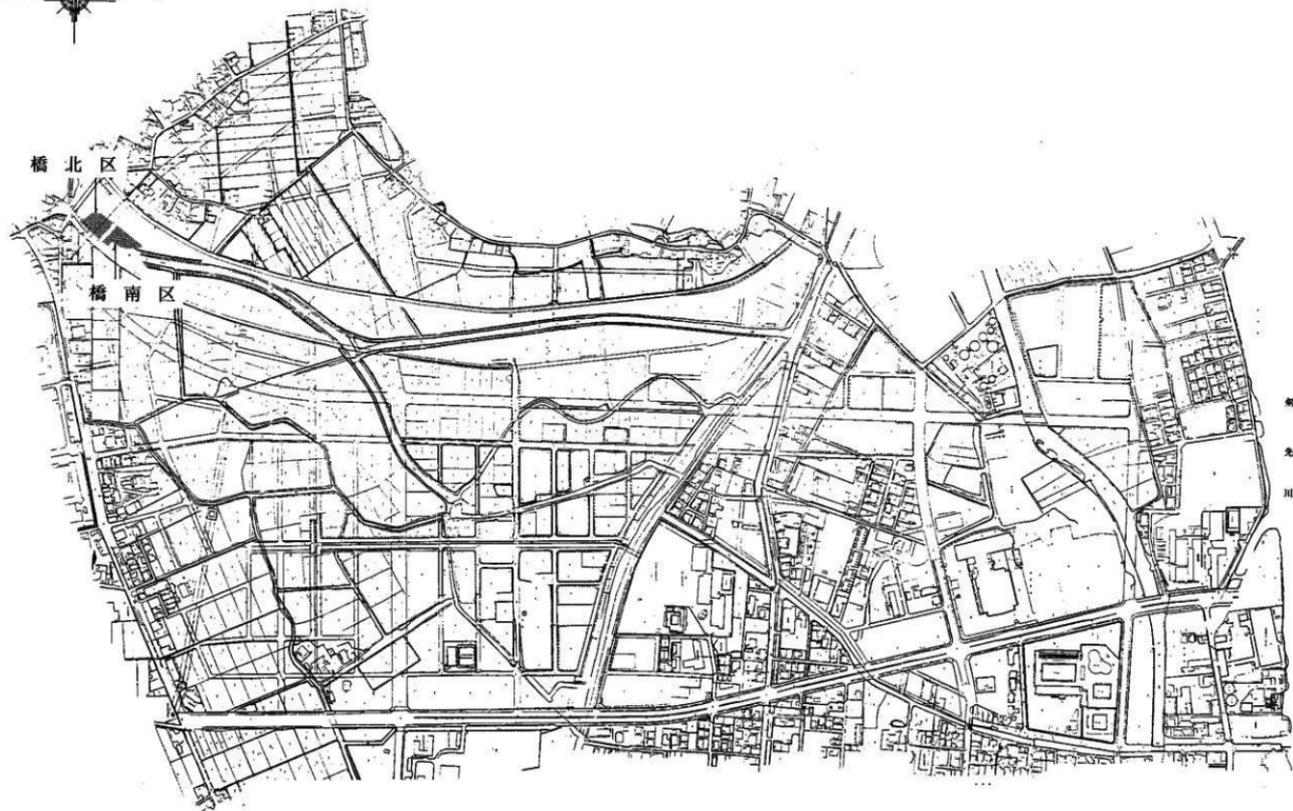
橋南区については、橋北区同様、道路方向に傾斜しているものの、平坦な部分は認められなかった。橋北区に比べ傾斜が急であり、また、砂礫層が少なく、砂層及び細砂層が大半であった。

遺物は須恵器や弥生土器の摩滅した破片が混在して出土する程度であった。

今回の調査では、調査区が水路により分割されていたため、両調査区を連続した形で把握することはできなかった。しかしながら、前述の状況から推測すると、道路方向に中心部を持つ旧河川が、北から南に向けてわずかに東に蛇行しながら調査区付近を流下していたのではないかと考えられる。

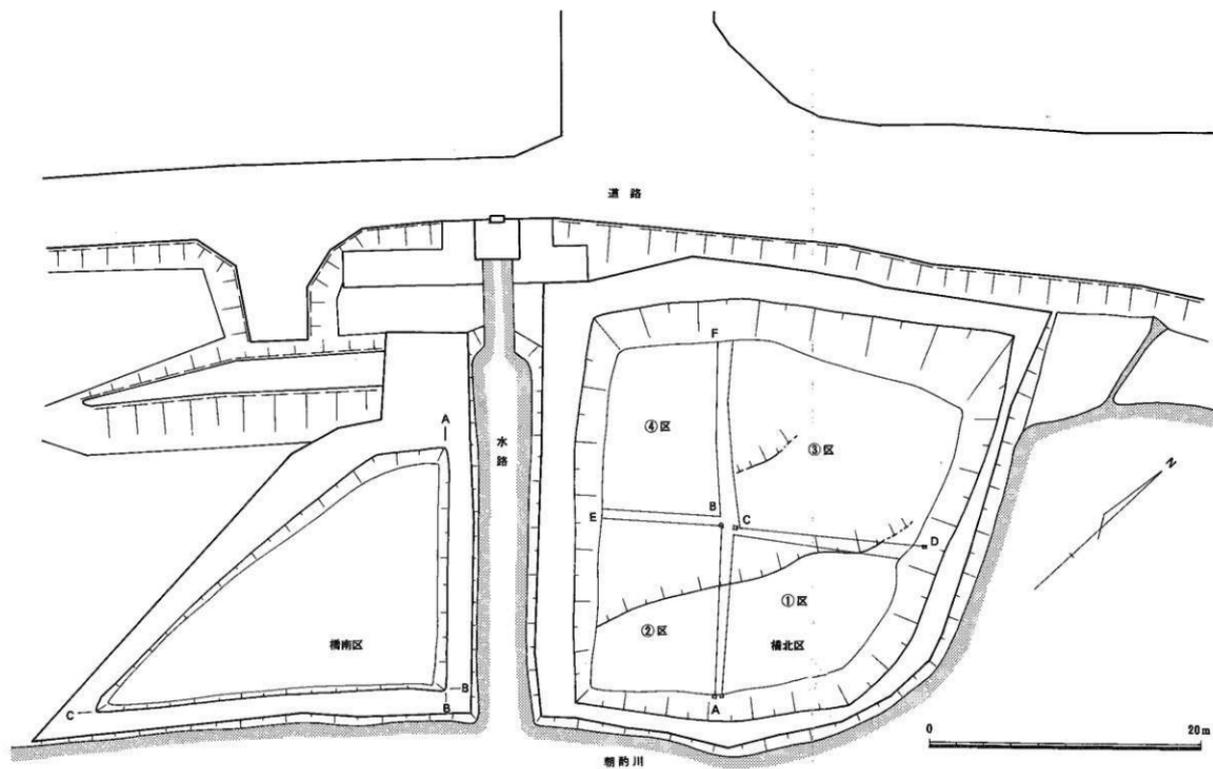


第36图 橘北区出土器物实测图-1



第37図 橋南区、橋北区調査位置図

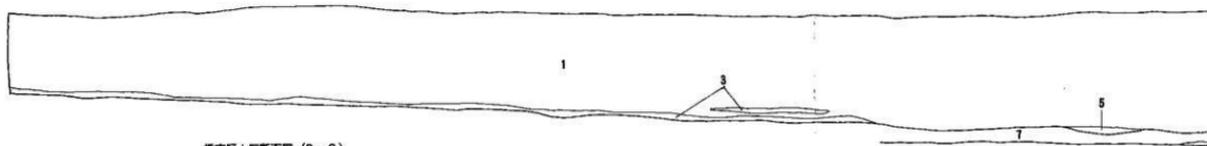




第38図 調査区平面図

B
L = 1.5 m

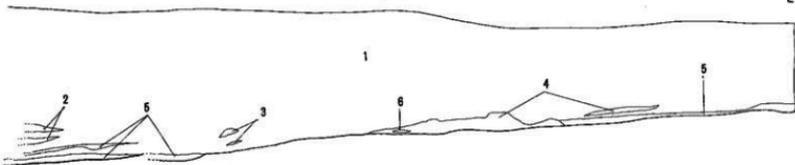
C



横南区土层断面图 (B-C)

A

B
L = 1.5 m

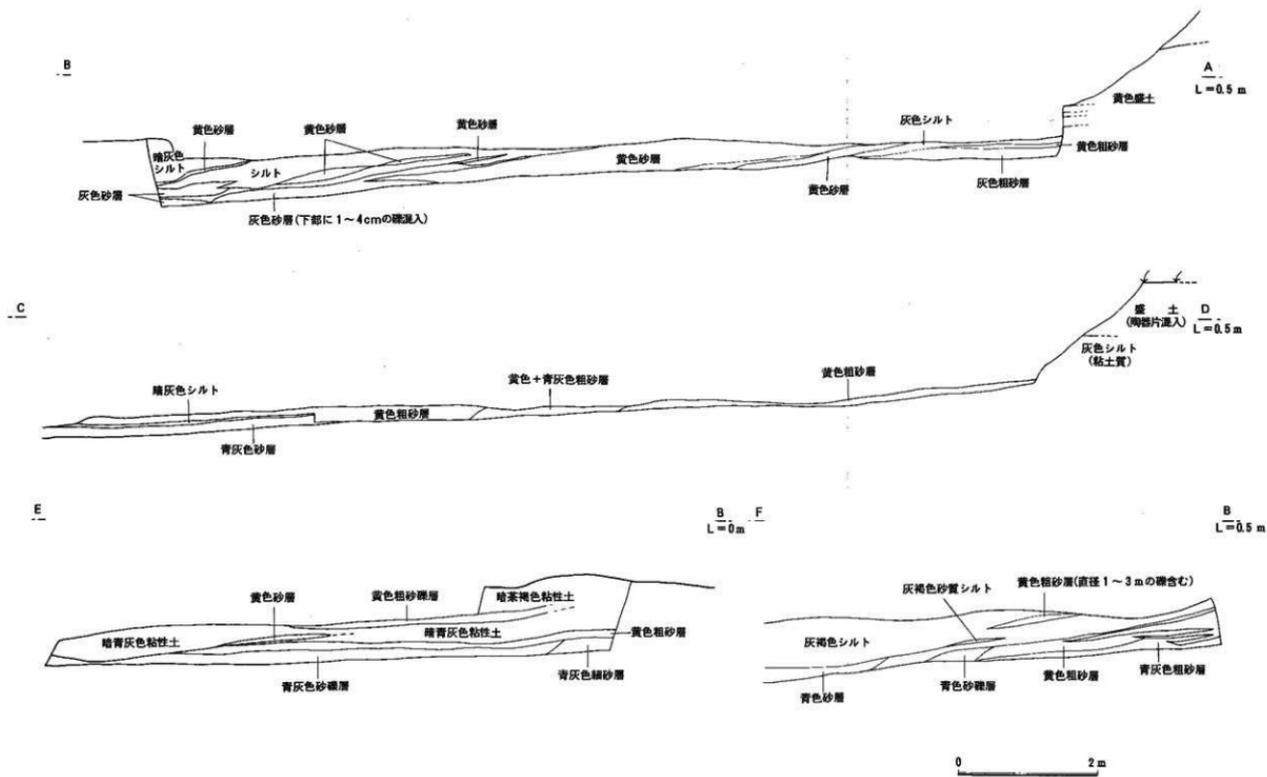


横南区土层断面图 (A-B)

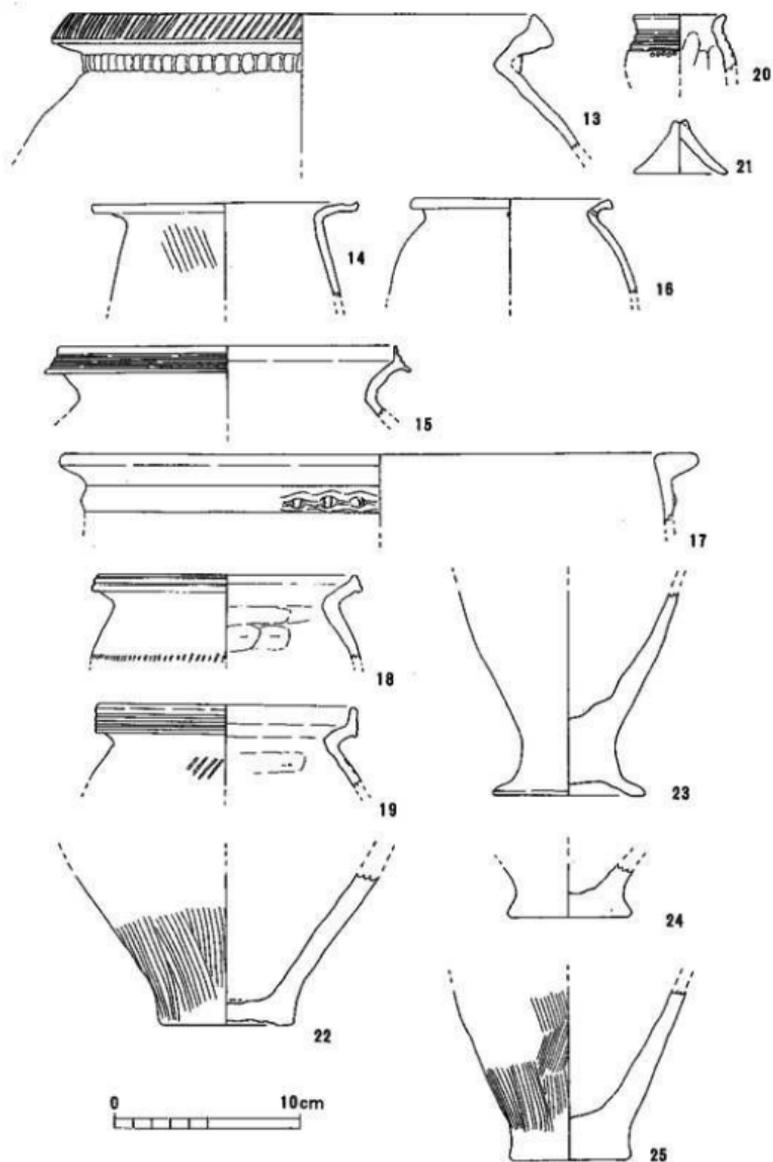
1. 暗灰色粘土层
2. 暗黄褐色细砂层
3. 暗青灰色砂层
4. 黄褐色砂层
5. 暗青灰色砂砾层
6. 暗褐色粘土层
7. 暗青灰色粘土层



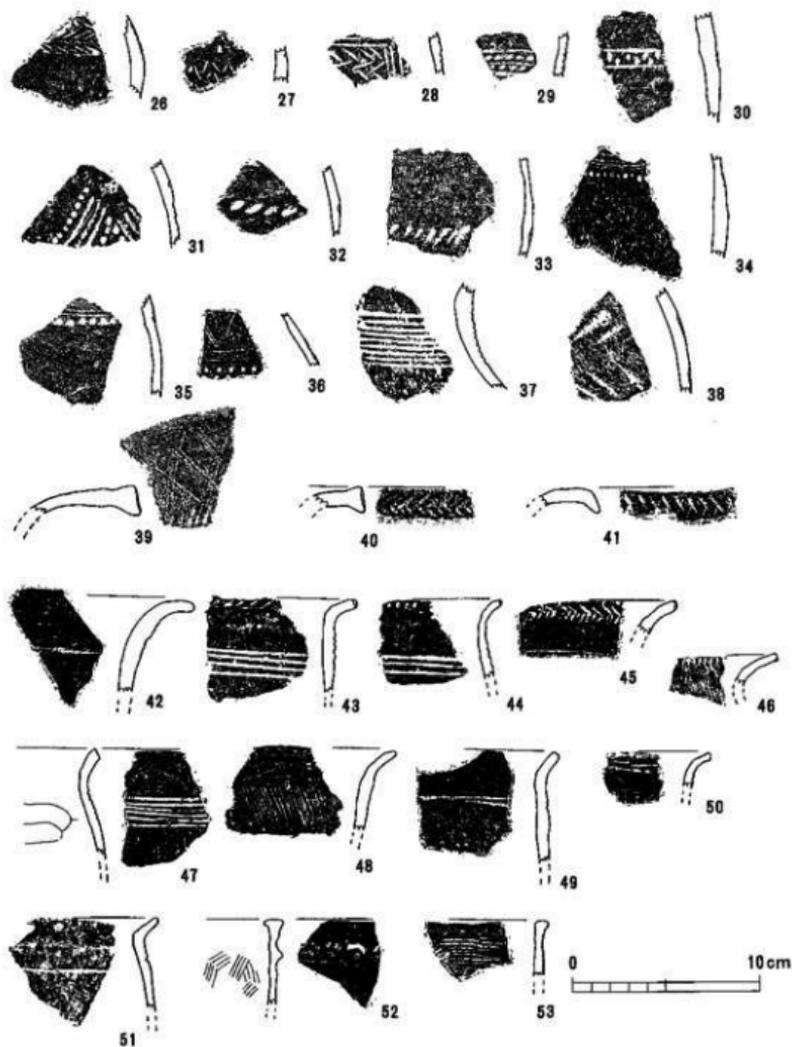
第39图 横南区土层断面图



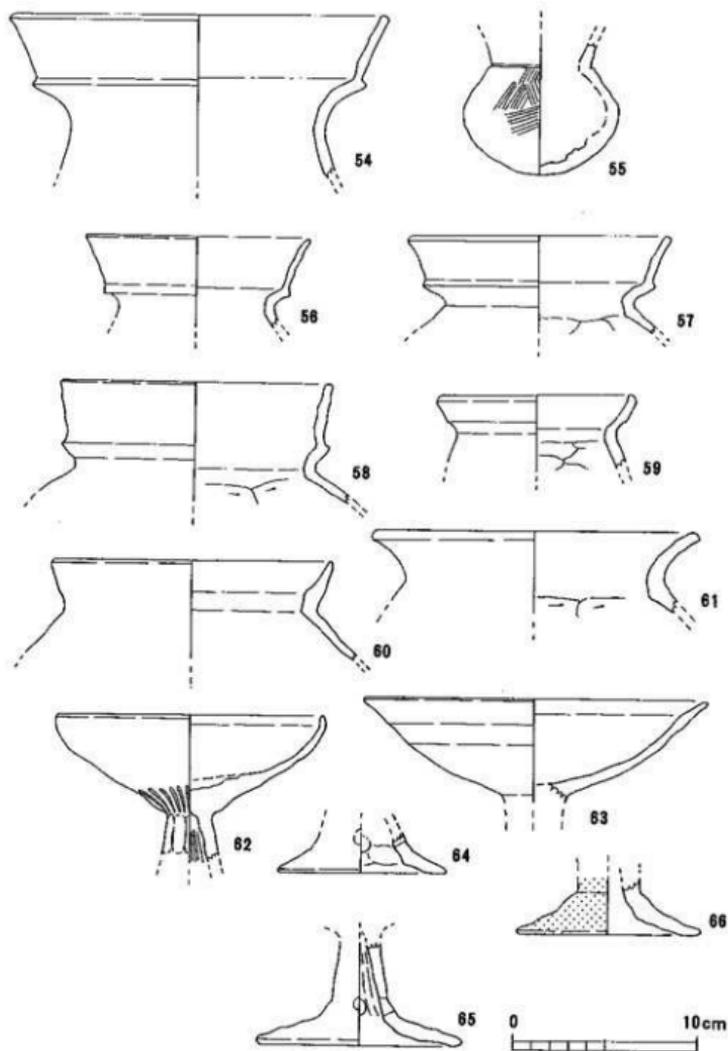
第40図 横北区土層断面図



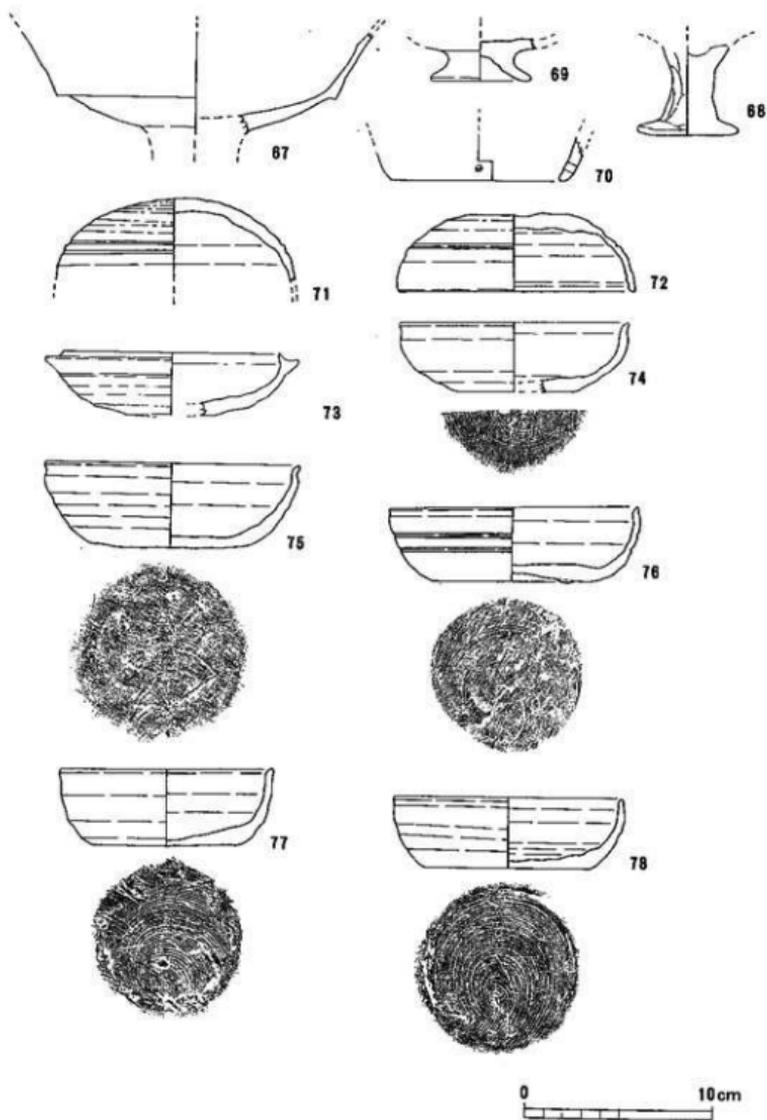
第41图 横北区出土文物实测图-2



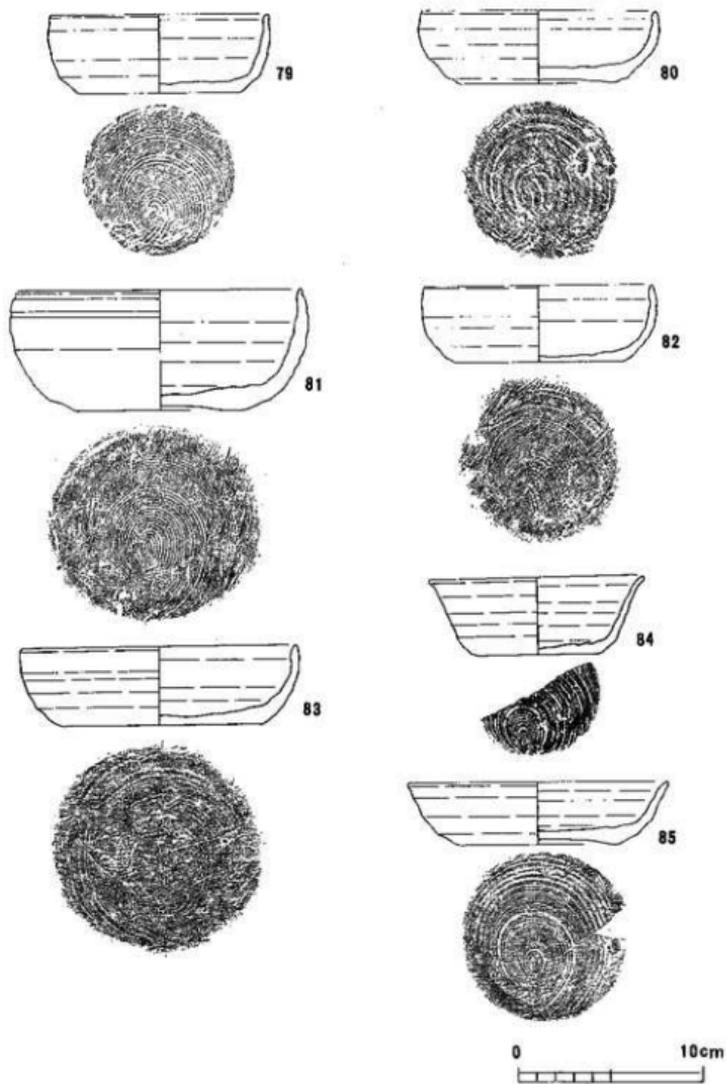
第42图 横北区出土遗物实测图-3



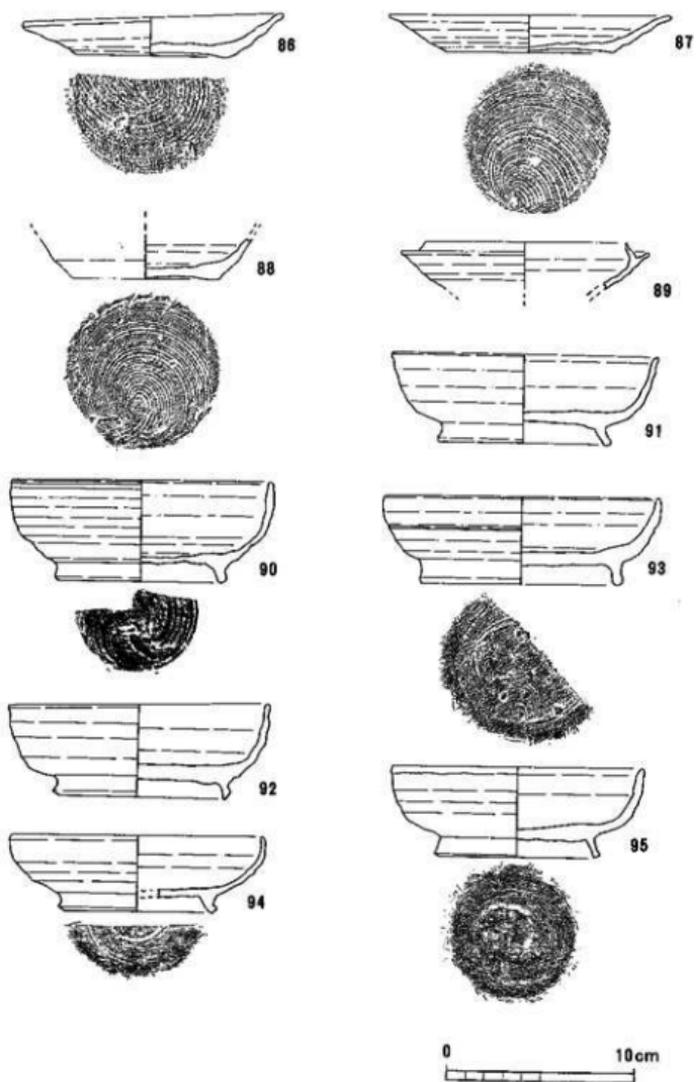
第43图 横北区出土文物实测图-4



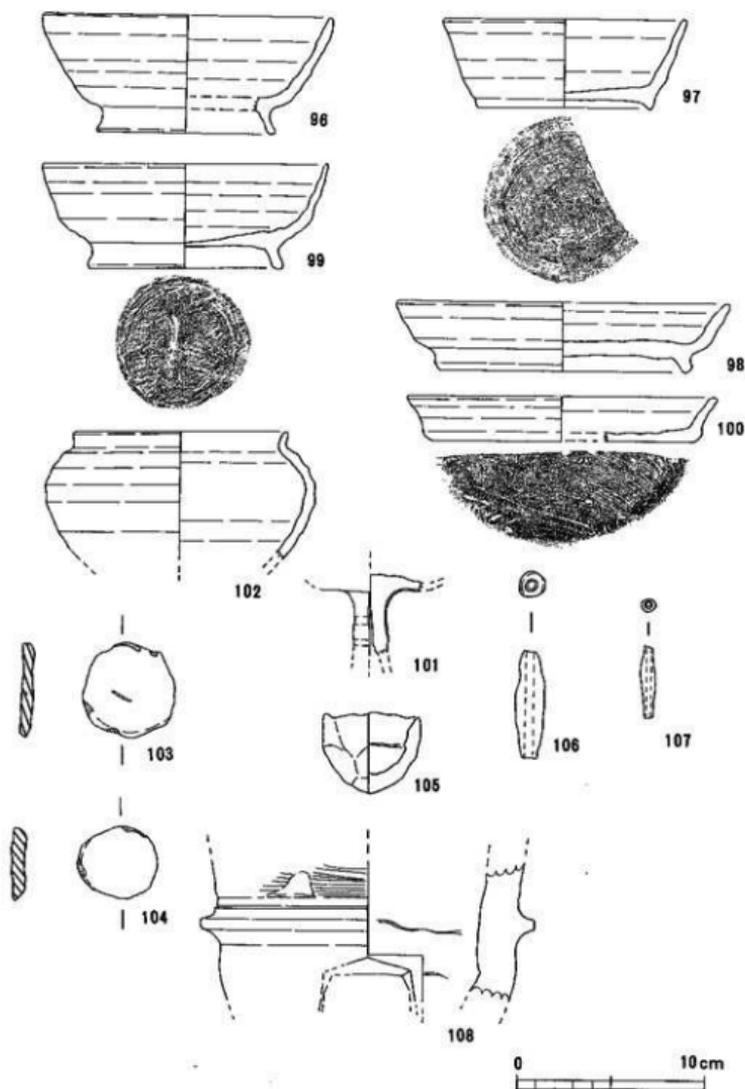
第44图 橘北区出土遺物実測図-5



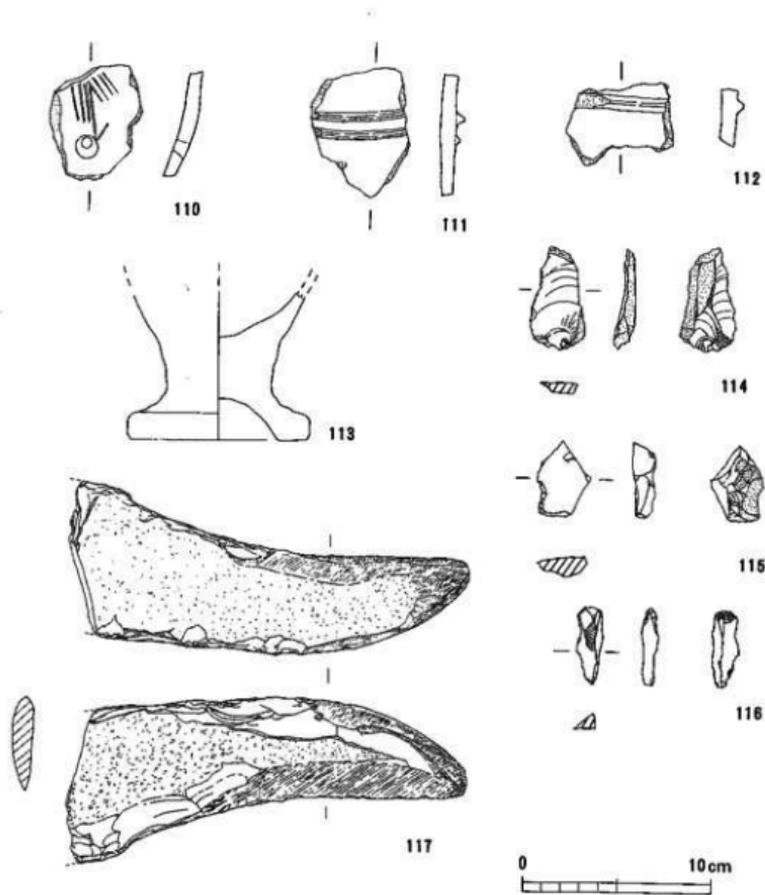
第45图 横北区出土遗物实测图-6



第46图 橘北区出土遺物実測図-7



第47图 横北区出土文物实测图-8



第48图 橘北区出土遺物実測図-9

IV 出土遺物について

昭和63年から平成2年までの遺物出土量はコンテナ21箱分である。その内388点を図示した。実測にあたってはできるだけ多くの器種、形式、形態を掲載することを念頭において進めた。また文様の種類を把握するため、実測図の後に拓影を掲載した。

昭和63年度

出土遺物量は上迫子笠無縁でコンテナ3箱分、33街区でコンテナ5箱分である。

〔上迫子笠無縁〕

1. 弥生土器

ア. 前期

1は甕である。口縁部は短く外反し、刻目文を施す。胴部はほぼ垂直に下り、9条以上の直線文を施す。11はヘラによる直線文と羽状文、12は貝殻腹縁による羽状文を施す。

イ. 中期

2は口頸部が「く」字状に屈曲し、胴部は大きく張り出す甕である。内外面にナデ。6は鉢である。口縁端部は平坦で、外方に肥厚する。胴部は外下方に伸びる。内外面にナデ。7は無頸壺である。胴部は内湾して下る。4列の突帯と1列の円形浮文を付す。突帯の3列に刻目文を施す。8は高杯の坏底部から脚部にかけての破片である。3列の刻目突帯文を施す。内面にしぼり痕を残す。13は壺の口縁部である。沈線を扶んで上下に円形刺突文を施す。5は小形の壺か。2列の突帯を付し、突帯に刻目文を施す。9、10は底部である。8は頸部に3条の圧痕文帯を有する高杯である。

ウ. 後期

4は口頸部が長く外反し、複合口縁を有する甕である。2条の凹線を施す。

2. 土師器

出土量は非常に少ない。壺は頸部に有軸羽状文を施す(3)がある。複合口縁を有する甕(14、15)が2点出土している。共に口縁端部は平坦で小谷式の特徴をもつ。

3. 陶磁器

近世以降の播鉢(16)が出土している。タテ方向に19条以上の沈線を施す。

4. 土製品

19は直径5.7cm、厚み0.5cmを測り、比較的大きく、ていねいに整形された有孔円板であ

る。17, 18は土鍔である。20はジョッキ型か、高坏の脚部と思われる。

5. 木製品

本調査区からは14点出土したが、全般的に破損したものが多く、性格を判明できたのは4種類だけだった。21, 22は斎串である。2点とも上下部を欠損している。長さ16cm, 14cm, 上端幅3.4cm, 3.3cm, 厚み0.5cm, 0.4cm。下端部は斜めに削られ尖っていたものと思われる。21には「V」字状の刻み込みが6箇所入れられている。23は箸状木製品で上下部を欠損している。長さ16.5cm, 径0.6cmを測る。24は円形曲物の底部かもしれない。大部分を欠損しているが円板状を呈す。木釘等の痕跡は認められない。25は大部分を欠損している。下端部と側面はシャープな平坦面を保つ。木釘が2本残存しており、側板と思われるが、半円形の切込みがあり、側板の種類を断定できない。

[33 街区]

1. 縄文土器

出土量は少なく、殆ど破片で出土しており、時期・器種を推定し得るものは6点しかなかった。

ア. 前期

1は上部肥厚帯には貝殻腹縁による刺突文、下部には条痕を施す。2は半截竹管状の工具により施文される。また縄文も施される。3は押引状の刺突文を施す。

イ. 後期

4は太い沈線文によって区画した内側に縄文が施されている。

ウ. 晩期

器種としては深鉢がある。5は口縁部に接して突帯が付される。突帯に刻目文を施す。7は口縁内面に刺突文を施す。

2. 弥生土器

本調査区では最も出土遺物が多かった。

ア. 前期

器種としては、壺、甕、鉢がある。8は壺の口縁部である。口唇部に有軸羽状文、刻目文を施し、頸部にへらによる直線文を施す。甕の6は口縁部が短く外反し、口縁部よりやや下った位置に刻目文を施した突帯を付す。胴部に竹管状工具による円形刺突文を施す。11は口縁部よりやや下った位置に突帯を付すもの。12は段を有するもの。13は口唇部に羽状文、頸部に直線文と刺突文を施すもの。28は口唇部に刻目文、胴部に直線文を施すもの。15は胴部に1条の沈線を施す。17は体部がほぼ直線的に伸びる鉢である。内面にへら磨き、

ナデ調整、口縁内面に指頭圧痕が認められる。24～28の文様は直線文を中心に描かれており、25には棒状工具による刺突文、26には円形刺突文、27には貝殻腹縁による羽状文を施す。24はヘラによる木葉文の小片である。

イ. 中期

10は口頸部が大きく外反する壺である。33、34は口頸部が「く」字状に屈曲する壺である。14は口縁部が緩やかに外反する甕である。16は口唇部に斜格子文を施す壺である。文様は直線文と刺突文を施した(30、31)、直線文と刺突文、波状文を施した29がある。

3. 土師器

出土量は少なく、図示できたものは甕2点である。32は口縁端部が内側に肥厚する。35は複合口縁を有し、口縁部は外反する。内面にヘラ削り、内外面にナデ調整。

4. 須恵器

須恵器も出土量は少なく、図示できたものは8点である。器種は坏、甕、長頸壺である。36～39は坏である。36、37、39は回転糸切りである。40は長頸壺の口頸部である。41は外面には頸部以下平行タタキ、内面には特異な押当具痕を残す。42、43は甕片である。

5. 土製品

44、45は土製円板である。直径6.8cm、6.5cmと大形のものである。土器片を円形に整形しただけで穿孔のないもので、有孔円板の未製品と考えられる。

6. 石器

46は長さ8.1cmの小刀状石器である。47は黒曜石の石鏃の未製品であろうか。

7. 木製品

48は露卯差歯下駄である。前後の歯は一枚平納で挿入する。前後の歯は基部から欠損しているが、前歯上面には4本の補強用の円孔がある。なお、指の圧痕から右足用と考えられる。49は漆塗碗である。口縁部と高台を欠損する。内面に赤漆、外面に黒漆、桔梗紋がかすかに確認できる。

平成元年度

[34 街区]

本調査区からの出土量はコンテナ7箱分である。

1. 縄文土器

2、3、4は晩期の深鉢である。3は口縁部やや下に突帯を付し、刻目文を施す。2は口縁部に接して突帯を付し、刻目文を施す。

2. 弥生土器

ア. 前期

器種としては壺、甕、鉢、蓋がある。

壺 口縁部が外反し、端部は平坦、口唇に施文されたもの(5, 113)、口縁部が外反し、頸部に段を有するもの(7)、口頸部内面に突帯を貼付けたもの(9)がある。16は肩部に円孔と貝殻腹縁による直線文を施す。

甕 口縁部が外反し、口唇部に刻目文、胴部に直線文を施すもの(21~23, 117~124)。口縁部が外反し、胴部に直線文を施すもの(24~26, 125~129)。口頸部が外反し、頸部に段を有するもの(20)。口縁部が外傾し、胴部に直線文を施すもの(27, 29, 134, 136, 137)。

55, 56は鉢である。55は口唇部に刻目文、胴部に直線文を施す。59は乳頭状のつまみを2つ表現した蓋である。文様は直線文と羽状文を施すものと、直線文と刺突文を施すものに大別できる。99は重弧文とタテ方向の直線文、102はクシ状工具による刺突文を施す。62は蓋形土器である。

イ. 中期

器種としては壺、甕、鉢、高坏がある。

壺 頸部突帯に刻目文を施したもの(6)。口縁部が外反し、口唇部に施文するもの(10~12, 33)。口縁部が外反し、口唇部並びに内面にも施文するもの(13, 18, 114, 115)。口縁部が外反するもの(14, 19)。口縁端部に凹線文を有するもの(15)がある。

甕 28は口唇部に刻目文を施し、胴部はすばまり直線文と波状文を施す。口縁部が外反するもの(34~36, 50)。口縁部が「く」字状に屈曲するもの(38, 39, 51, 53)。口縁部が「く」字のもの(40, 41)。刻目突帯文を施すもの(42, 43, 138)。口縁端部がやや拡張し、凹線を有するもの複合口縁を有するもの(44, 52)。

鉢は突帯を付す139と口縁端部が内側に肥厚し沈線文を施す155がある。67は刻目突帯文を施し、三角形と長方形の透かしを有する高坏である。69, 70, 78は底部である。

ウ. 後期

17は口縁部に凹線を施す壺である。45~48は複合口縁を有する甕である。68は注口土器である。162は9条の凹線を施した器台である。

3. 土師器

140~143は壺である。その内、140, 141は複合口縁を有す。144~149は甕である。その内144~146は複合口縁を有す。140, 144, 146の口縁部は平坦で、小谷式の特徴を持つ。156は鉢である。60, 61, 65, 66, 157~160は高坏である。161, 173は低脚坏である。177は

坏である。

4. 須恵器

163～171は坏である。163～168の体部は内湾して伸び、口縁部付近にくびれを有す。169の体部は外反して伸びる。172は坏身の小片である。174～176は高台付坏である。178～180は甕片である。

5. 土製品

181は分銅型土製品である。厚みは中央で1.05cm、上下端部で0.8～0.9cm、全長6.85cm、上部幅6cm、くびれ部幅2.1cm、下部幅推定5cmを測る。直径1mm前後の円文を表、裏、側面は4段にわたり刺突する。182は土製円板である。直径5.7cm、厚み0.7cmを測り、沈線を施した土器片を整形した、穿孔のない有孔円板の未製品である。183、184は土錘である。

6. その他の土器

185は吉備系の高坏であろう。186は高坏の脚部か。187は断面三角形の突帯を付し、弥生土器の壺の頸部と思われる。

7. 石器

188は石鏃、189は全面を研磨しているが用途は不明である。191は磨いて刃部を作っている。192は側縁に施溝のある板状の石製品で、擦切未製品と呼ばれているものである。193は扁平片刃石斧の破片である。194は石斧の破片である。石質は黒色玄武岩である。195は両側面の外縁が打ち欠かれたもので、用途は不明、玉髓質である。196は安山岩製の石鏃である。197は滑沢のある変成岩を利用した内磨砥石であろう。

平成2年度

[橋北区]

本調査区の遺物出土量はコンテナ6箱分である。弥生土器と須恵器が大部分を占めている。

1. 縄文土器

出土量は非常に少なく、細片のみである。

4は口縁部が「く」字形に屈曲し、胴部は中程で明瞭に縁が付く晩期の浅鉢である。口縁端部は肥厚する。5は貼付け突帯上に円形刺突文を施す波状口縁の土器である。

2. 弥生土器

ア. 前期

甕は口縁部が外反し、口唇部に刻目文、胴部に直線文を施す(43, 44, 45, 50)ものと、胴部に直線文を施すのみのもの(9~11, 47, 49, 51)、胴部に段を有すもの(42)がある。21は小形の蓋である。22は底部である。文様は直線文を中心に羽状文を施す(26~28)ものと円形刺突文を施すもの(29, 30, 35)とに分けられる。28はヘラによる羽状文に区画直線文を施す。31は斜軸円形刺突文の間に斜線文を施す。37は直線文を施す壺形土器である。

イ. 中期

器種としては壺、甕、鉢がある。

壺 口縁端部が平坦で刻目文を施し、口縁内面に施文されたもの(6, 39)、されないもの(7, 40, 41)。6はクシ状工具による斜行刺突文、39は斜格子文、7は頸部に円形刺突文と直線文を施す。

甕 口縁部が外反するもの(8, 12)、「く」字状のもの(14)、刻目突帯文を施すもの(13)がある。16は全面に黒漆を塗布し、頸部に円孔を穿つ。17には工具による圧痕文帯が施されている。34は直線文に刺突文を施す甕片、36は円形刺突文と直線文と波状文を施す甕片である。

鉢 指頭圧痕文帯をもつ52がある。53は口縁部の下に直線文を施す。

ウ. 後期

15, 18はくりあげ状の口縁を有する甕、19は複合口縁を有する甕である。

3. 土師器

54は複合口縁を有する壺である。55は小形の壺である。甕は複合口縁を有するもの(56~58)と単純口縁のもの(59~61)がある。56は口縁端部は丸く、57, 58は平坦である。62~68は高坏である。62の口縁部はやや内湾し、端部付近ではほぼ垂直に伸びる。63の口縁部はほぼ直線的に外上方に伸びる。64~66は大きく開く脚部である。66は外面に赤色塗彩が施されている。64, 65には円孔を穿つ。68は高坏形のミニチュア土器である。69は低脚坏である。70は甕である。

4. 須恵器

器種としては坏蓋、坏身、無高台の坏、高台付坏、盤、皿、高坏、甕がある。71, 72は坏蓋である。71は天井部と体部の境付近に浅い沈線が2条、72は1条施されている。山本編年Ⅲ期と思われる。73は短く内傾するたちあがりをもつ坏身である。89は比較的高く内

傾するたちあがりをもつ杯身である。74～84は無高台の杯である。74～76、78の体部は内湾してのび、口縁部付近にくびれを有す。74、76は糸切り後ナデ。77、79～83の体部は内湾し、ほぼ垂直に上り口縁端部に至る。78、79、81の底部は回転糸切りである。84の体部はほぼ直線的に伸び、口縁部はやや外反する。86、87は皿である。84、86、87は平安期のものであろう。底部は回転糸切りである。90～97、99は高台付杯である。90～95の体部は内湾して口縁端部に至る。92、94、95はヘラ切り後回転ナデ。90、93は回転糸切り。96、97の体部はほぼ直線的に伸び口縁端部に至る。98は盤で、底部は糸切り後回転ナデ、97は回転糸切り。99の体部は内湾して伸び、ほぼ垂直に上る。底部は静止糸切り。100は盤で、底部は静止糸切りである。焼成が悪く赤褐色である。101は小形の高杯である。102は短頸壺である。

5. 土製品

103、104は直径5.1cm、4.2cm、厚み0.7cm、0.7cmの土製円板である。土器片を円形に整形しただけで穿孔のないもので、有孔円板の未製品と考えられる。105は手づくね土器である。指頭圧痕と粘土継目痕が確認できる。106、107は土錘である。

6. その他の土器

108は円筒埴輪片と思われる。突帯を付し、真下に四角形の透かしを穿つ。110は円孔を穿たれた土器片である。甗片ではないかと思われる。111、112は断面三角形の突帯を付す破片である。弥生土器と思われる。113はジョッキ形か高杯の脚部と考えられる。

7. 石器

117は局部磨製石鎌である。長さ20.2cm、厚み1.3cmを測る。114～116は黒曜石の屑である。

V 小 結

それぞれの地区の調査の結果、出土遺物としては縄文時代後晩期頃から弥生時代、古墳時代、歴史時代各期の土器片を主体に石製品、木製品が発見された。

出土状況を見ると、全体的に流されて砂礫層中に堆積したものが全てであり、遺構を伴っていない。また、橋梁区や34街区のようにかなり集中的に多量の遺物が出土した箇所もあるが、土器片数点程度という箇所もあり、量的にかなりばらつきが認められる。このことから調査区域は当時河口付近や河口に近い水底であったと推定される。

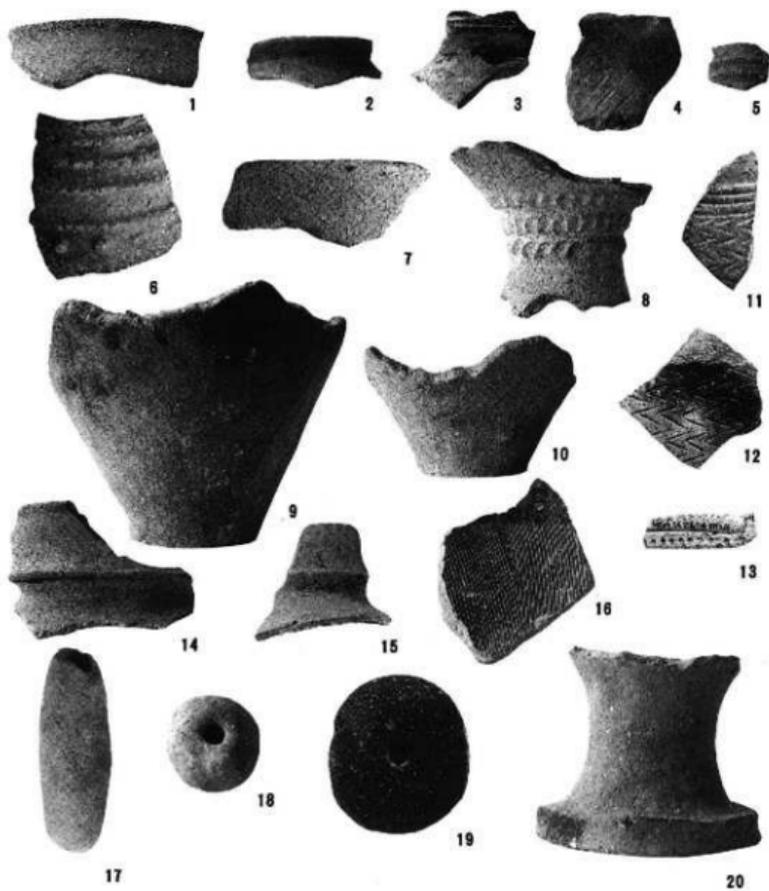
さらに遺物の示す時期から考えるならば、平安時代の恐らくは9世紀頃に大規模な洪水があり、河口付近一帯が氾濫し、流路の変更もあったのではないと思われる。

次に出土遺物の内、注意されるものは34街区出土の分銅型土製品である。これは岡山県下を中心に二百数十例あるが、中国地方だけに限定されて認められる特殊な信仰関係遺物である。県下ではこれまで非常に出土例が少なかったが、最近西川津、タテチョウ遺跡出土例が増加し、現在のところ12例確認されている。古代吉備地方との信仰を媒介にした関係を知る上で重要である。

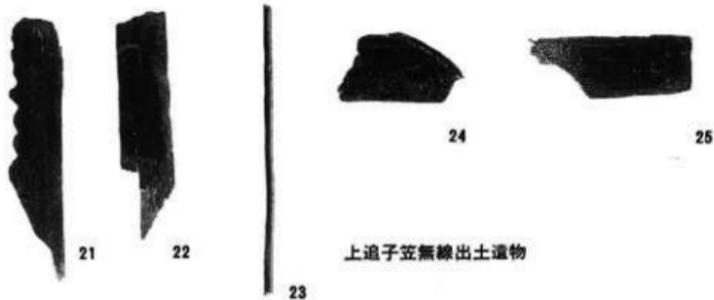
また、橋梁部分の調査で発見された局部磨製石鎌はこれまで西川津遺跡等で8例発見されているが、先端から基部まで遺存し、完形に近い石鎌としては非常に珍しいもので弥生期の当地方の農耕の実態を知る上で重要である。

図 版

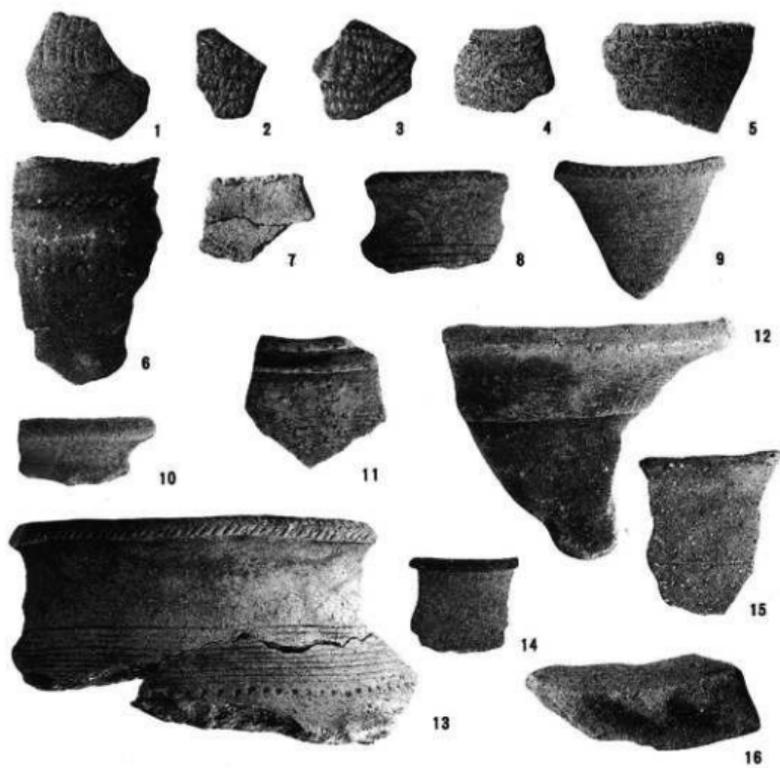
PL-1



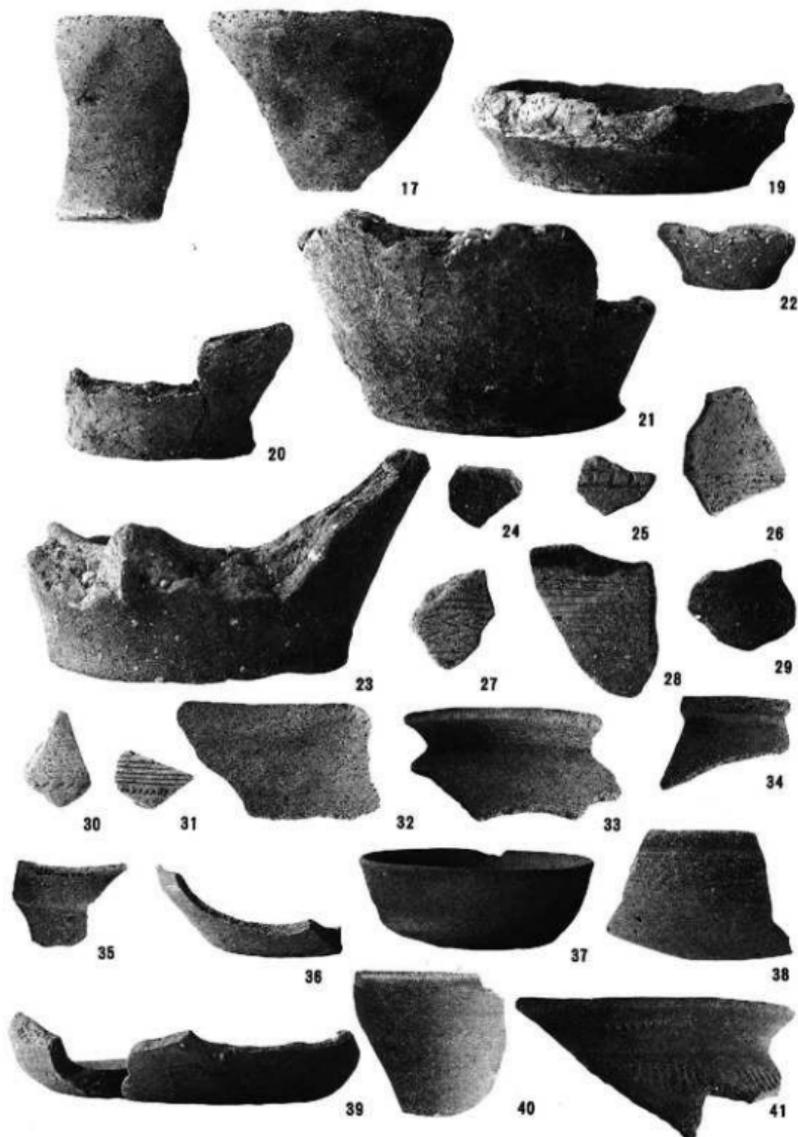
上道子笠無線出土遺物



上追子笠無線出土遺物



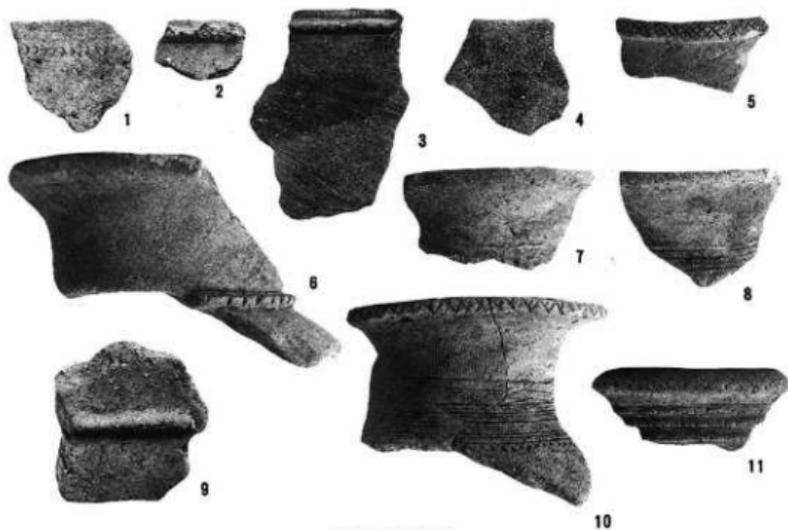
33街区出土遺物



33街区出土遺物

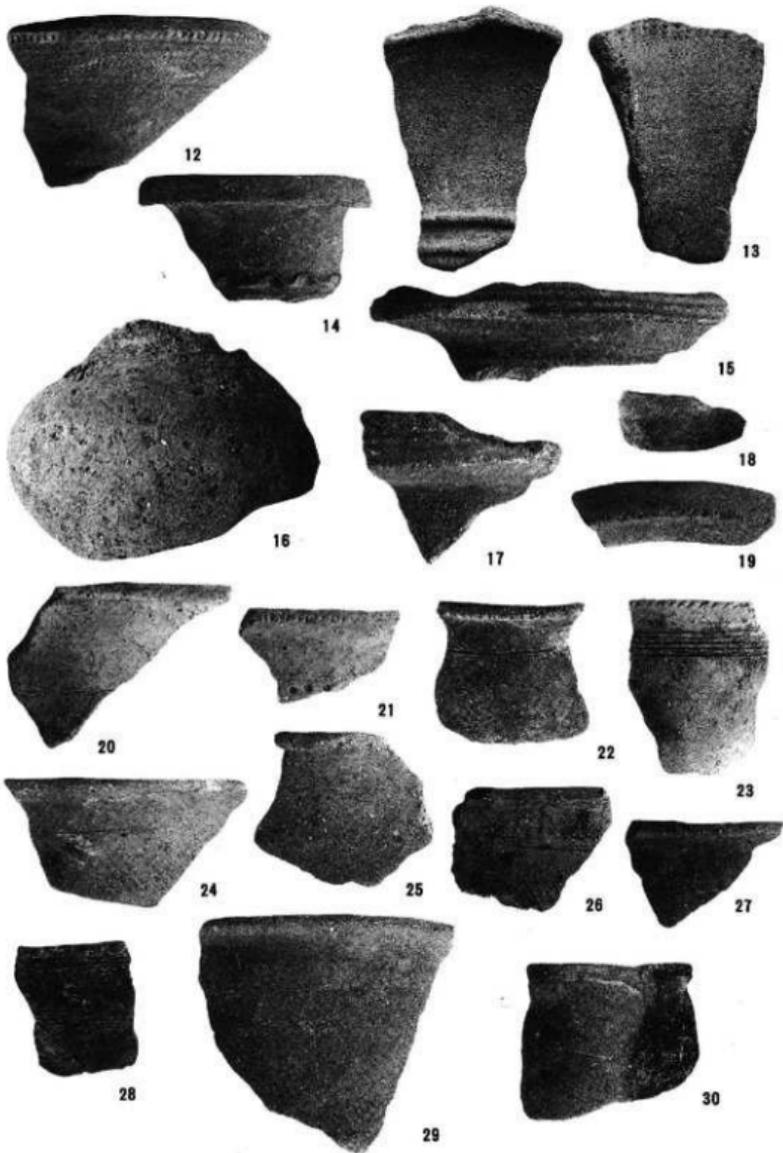


33街区出土遺物

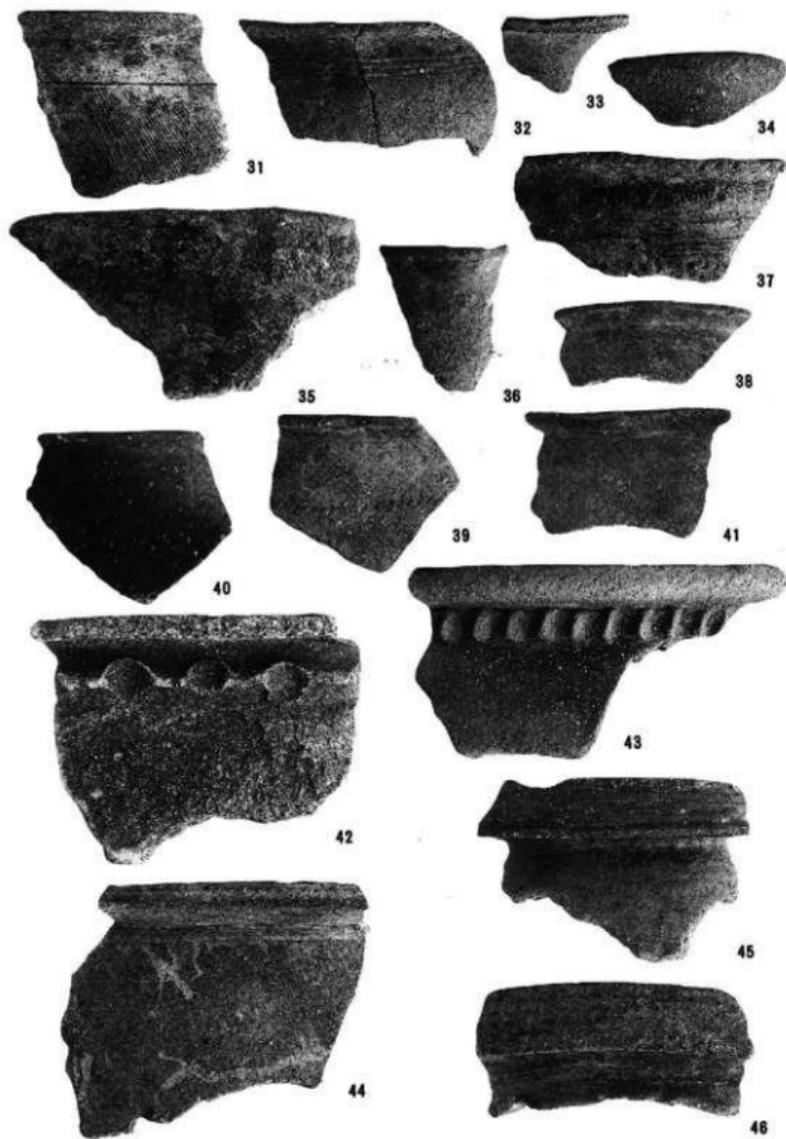


34街区出土遺物

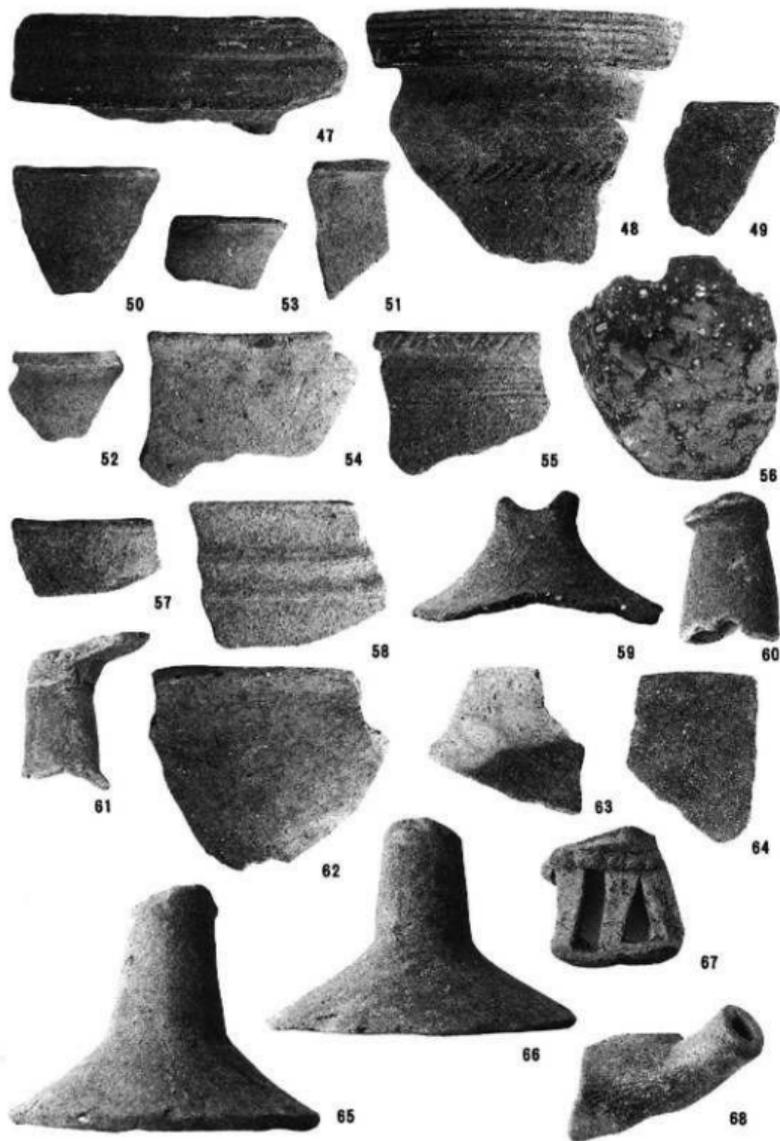
PL-5



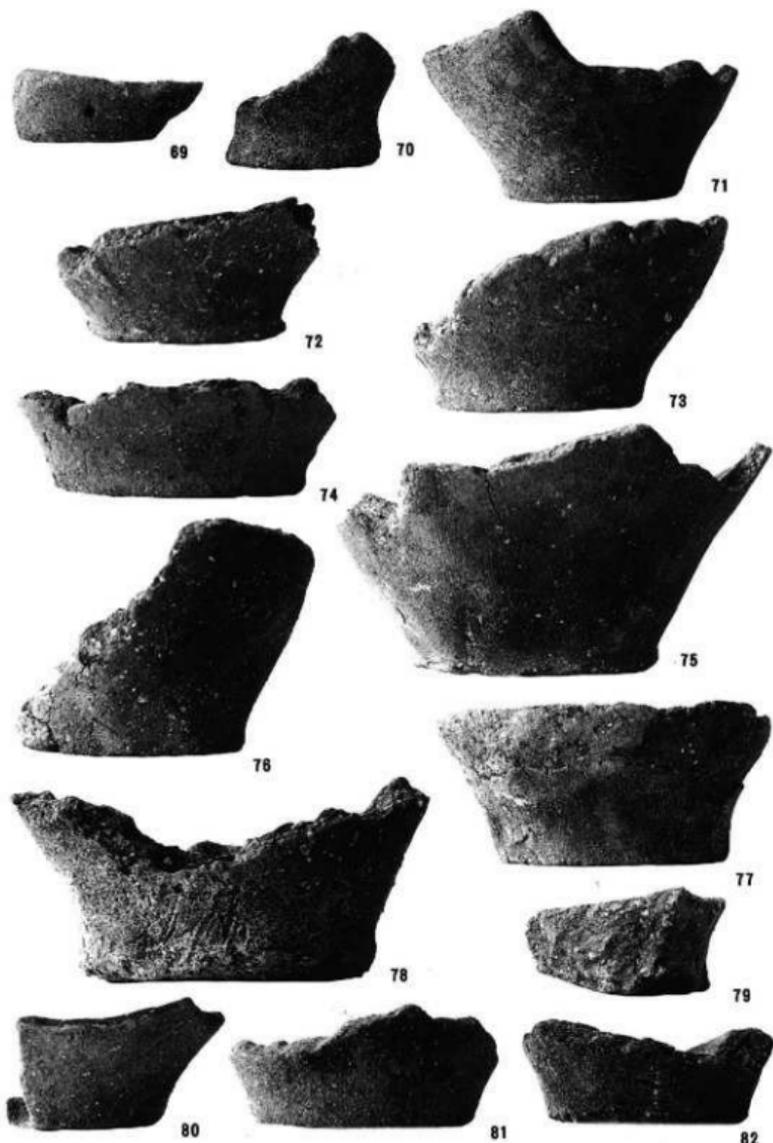
34街区出土遺物

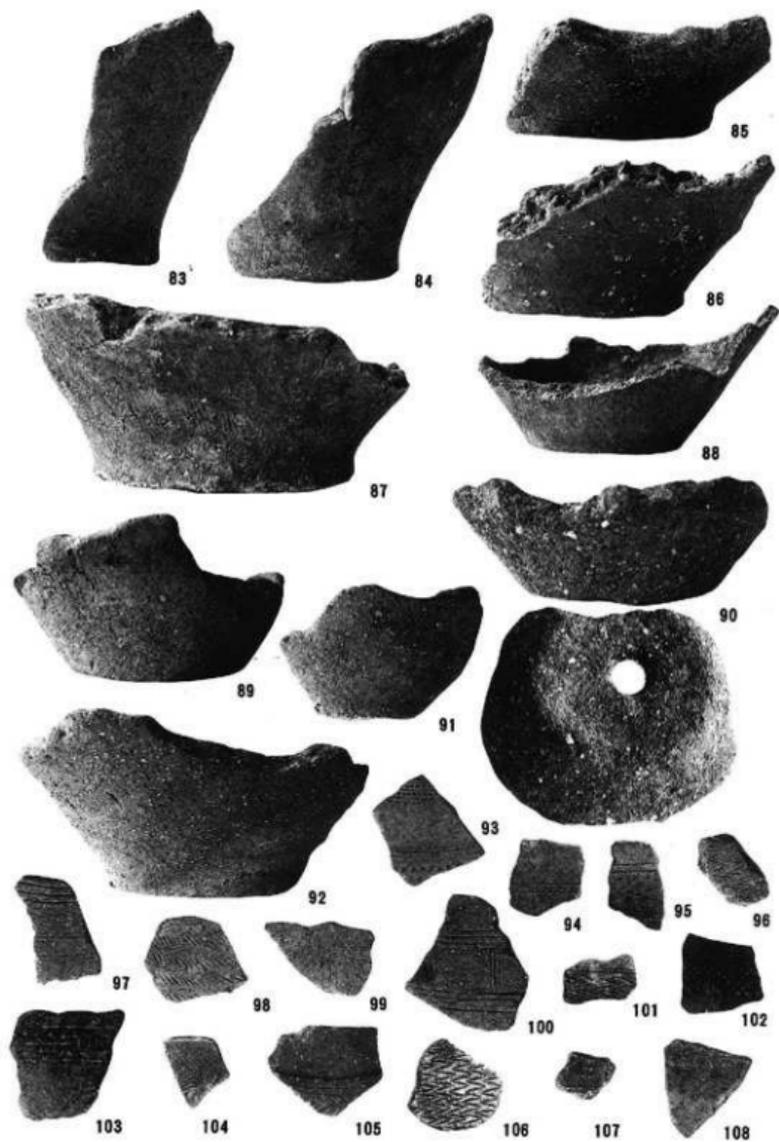


PL-7

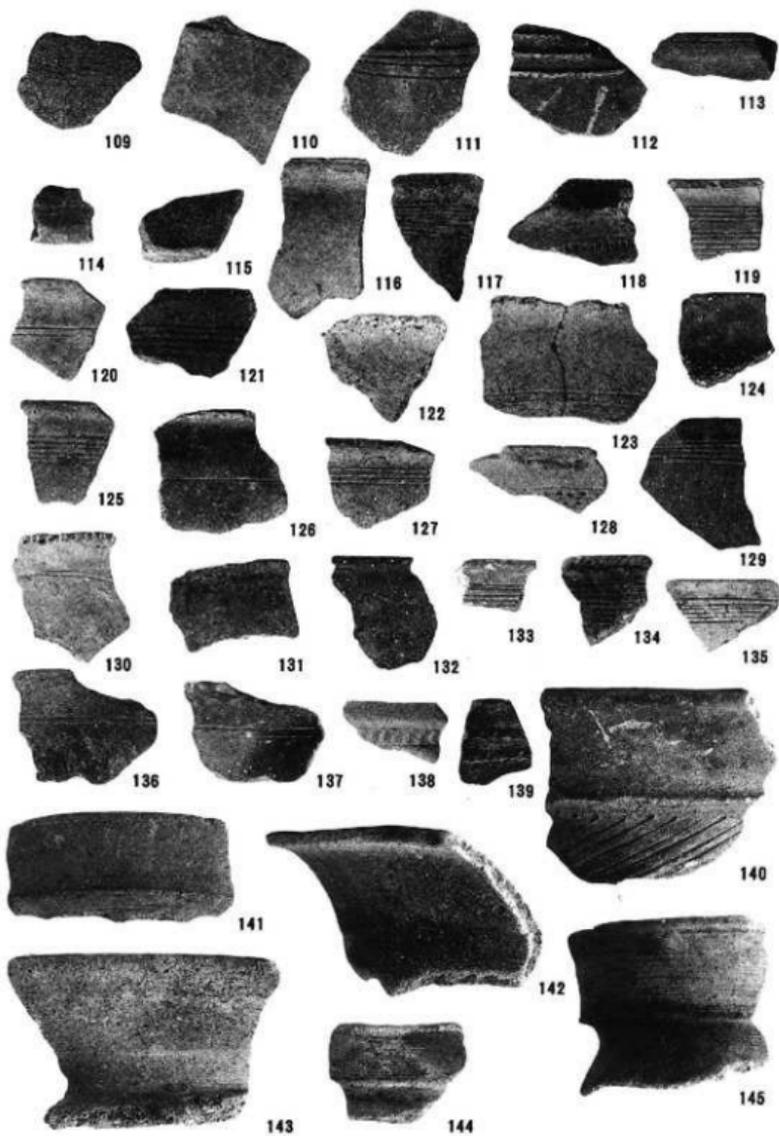


34街区出土遺物

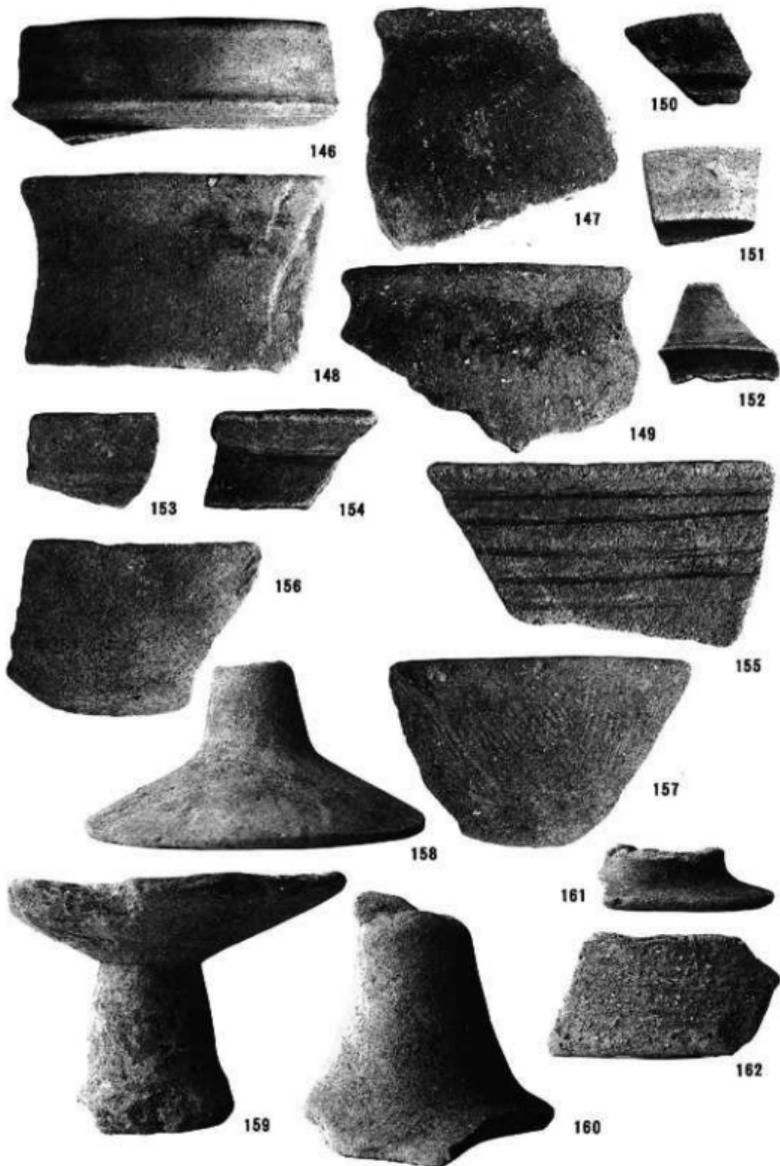




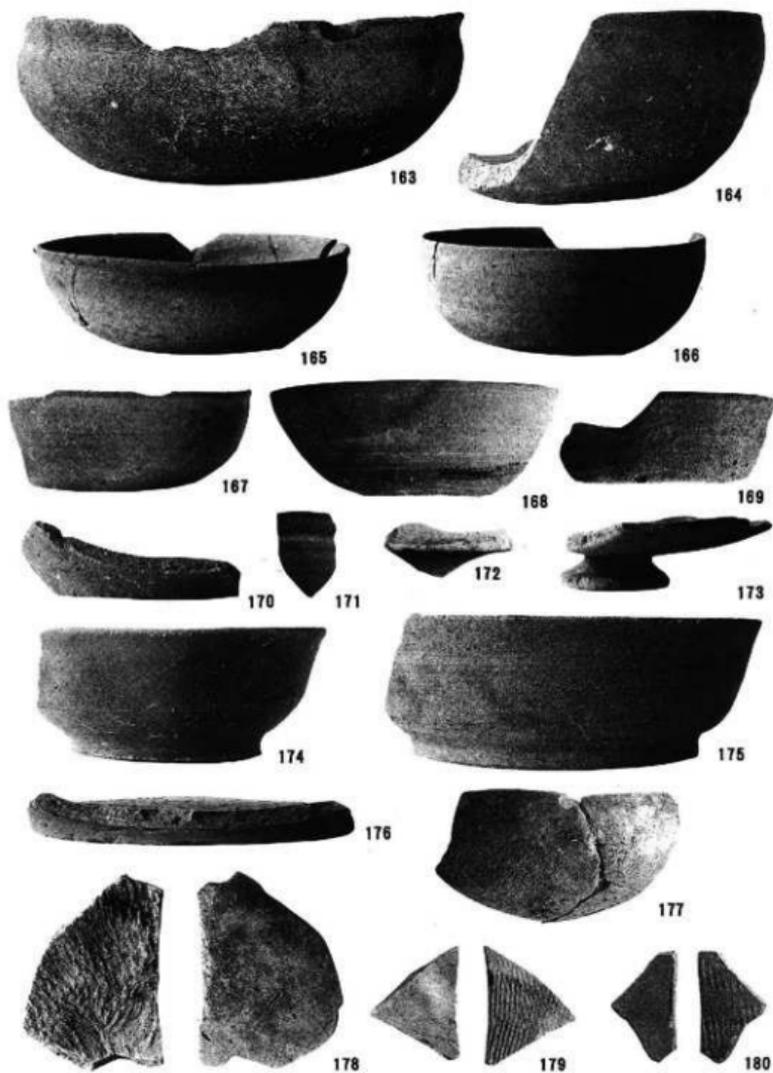
34 街区出土遺物



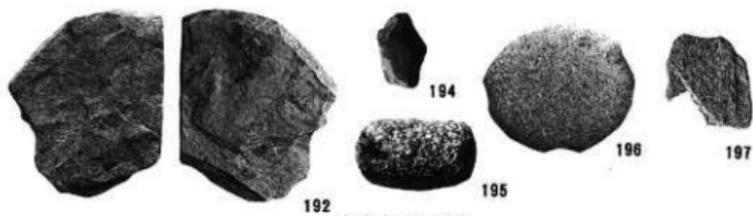
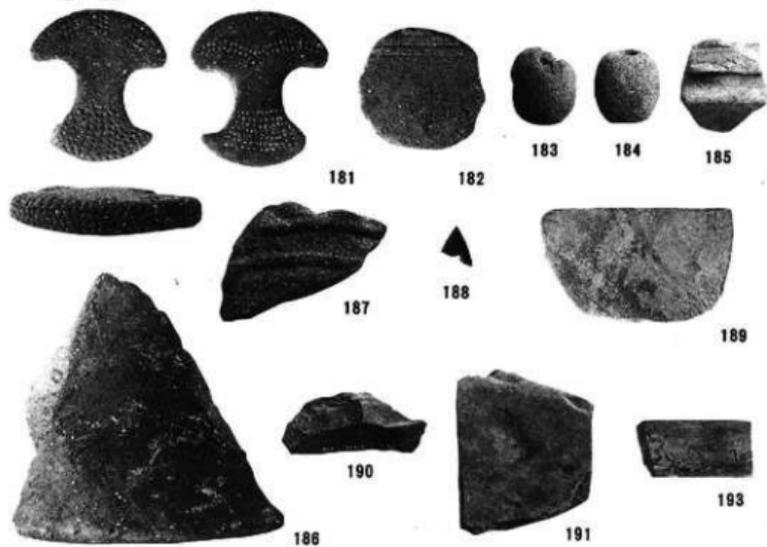
PL-11



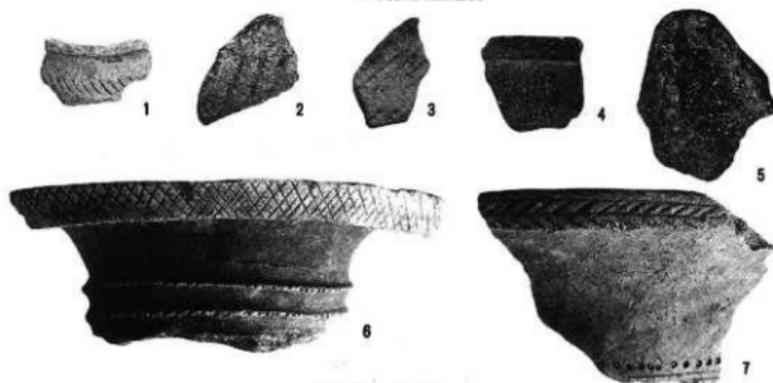
34街区出土遺物



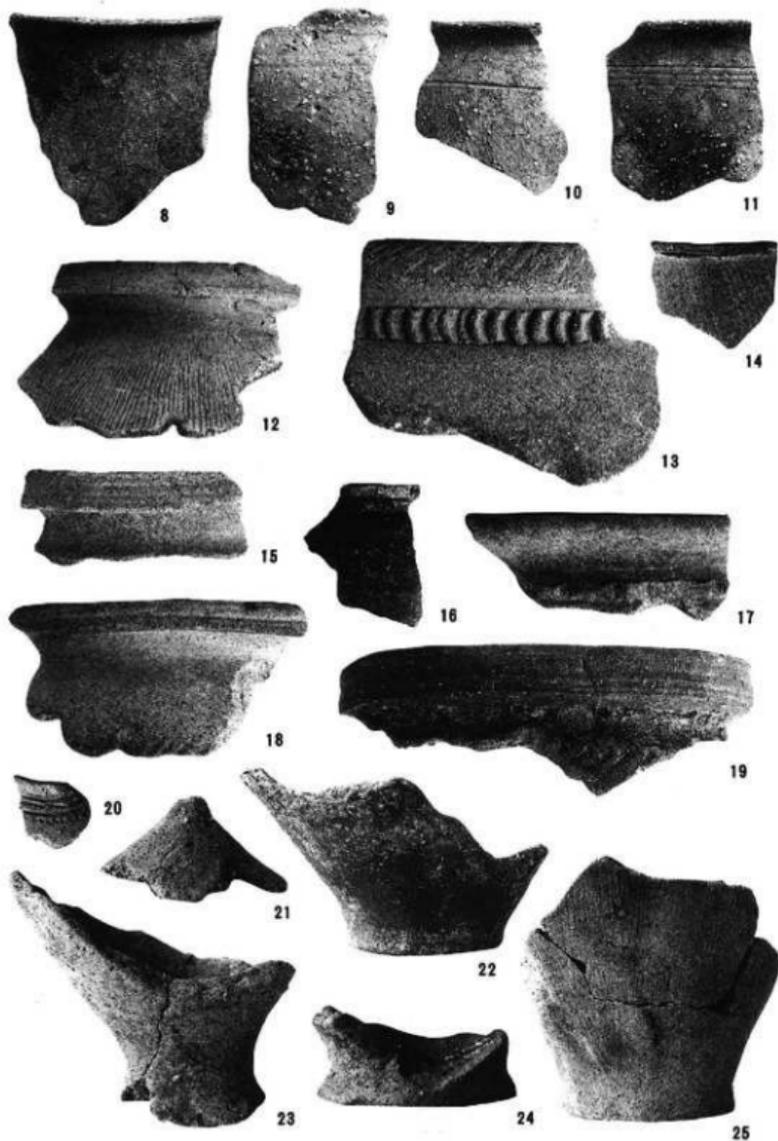
PL-13



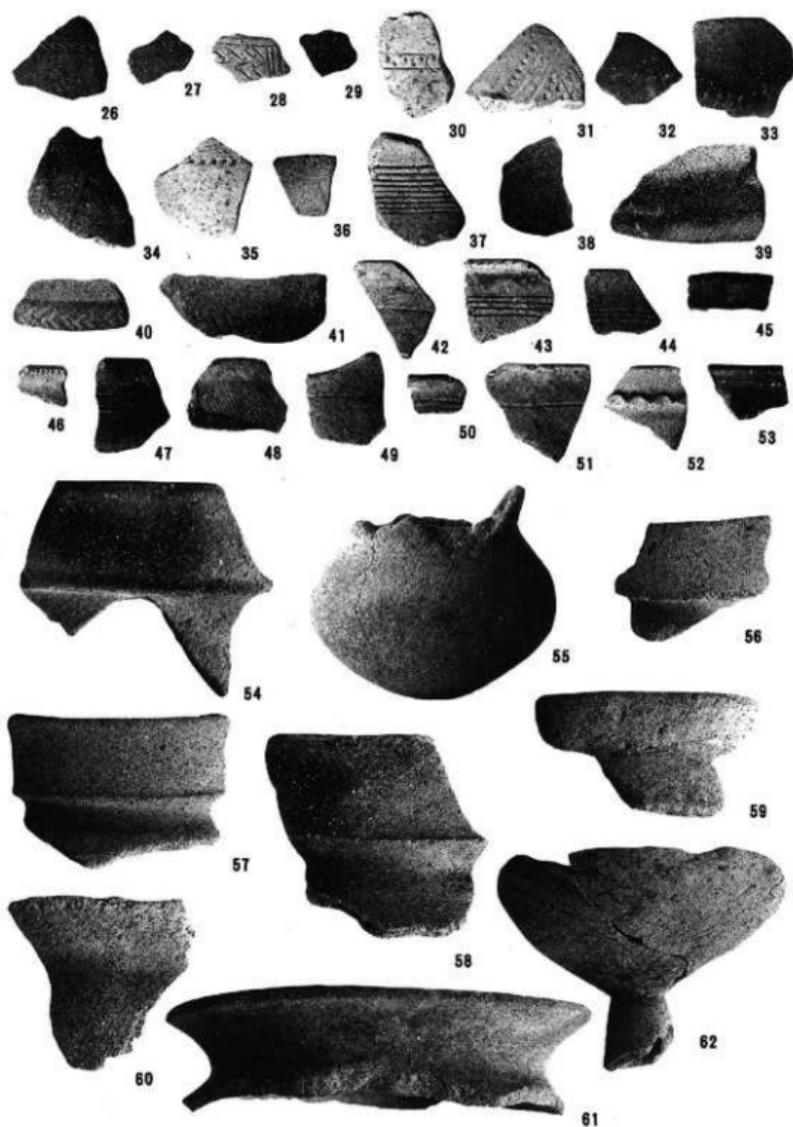
34街区出土遺物

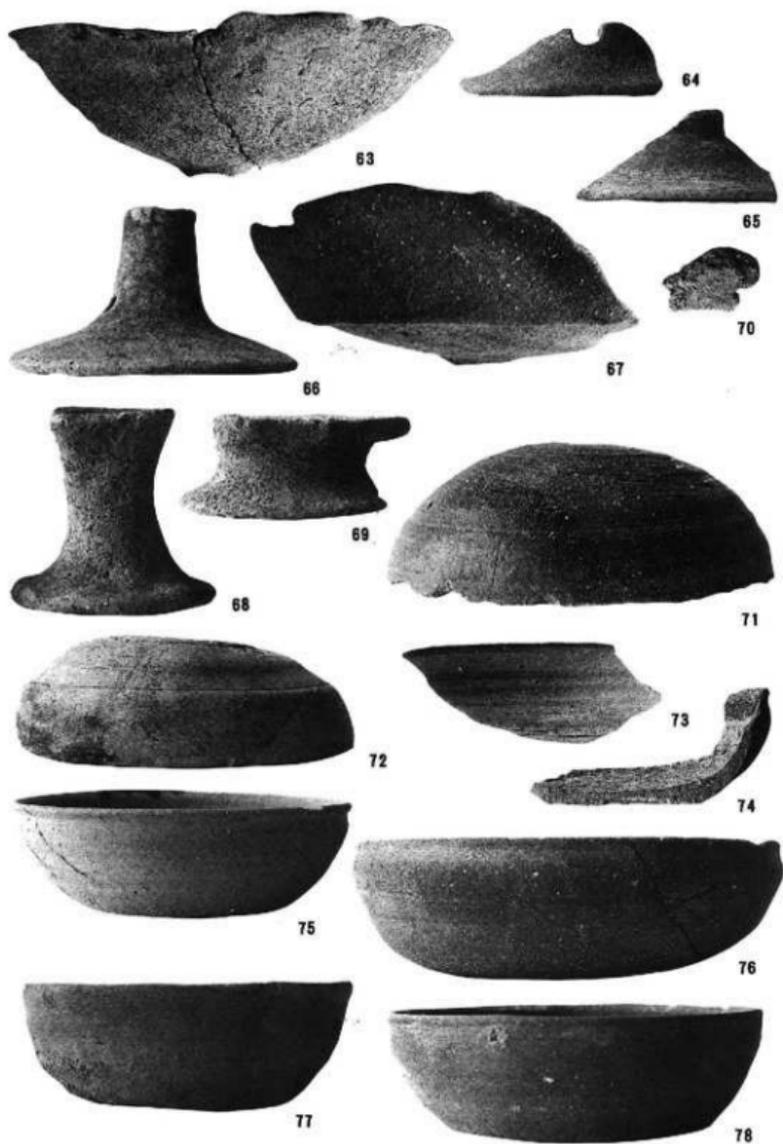


平成2年度出土遺物

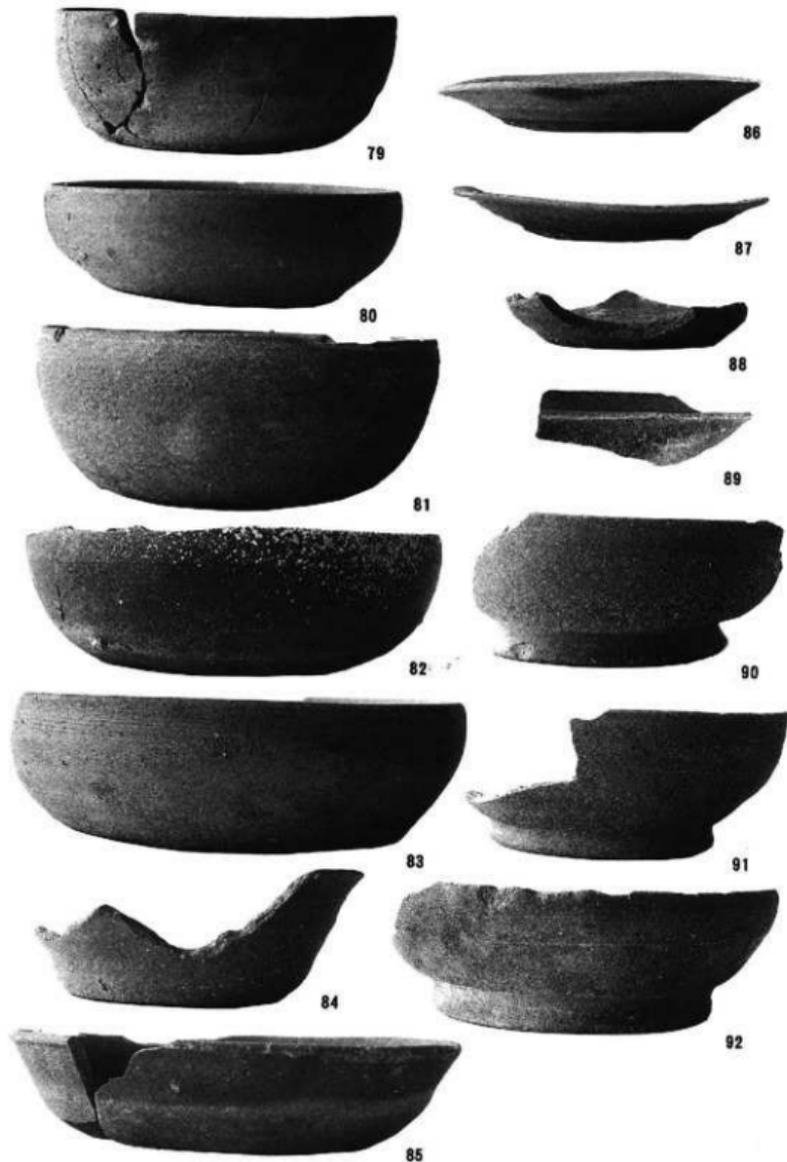


平成2年度出土遺物

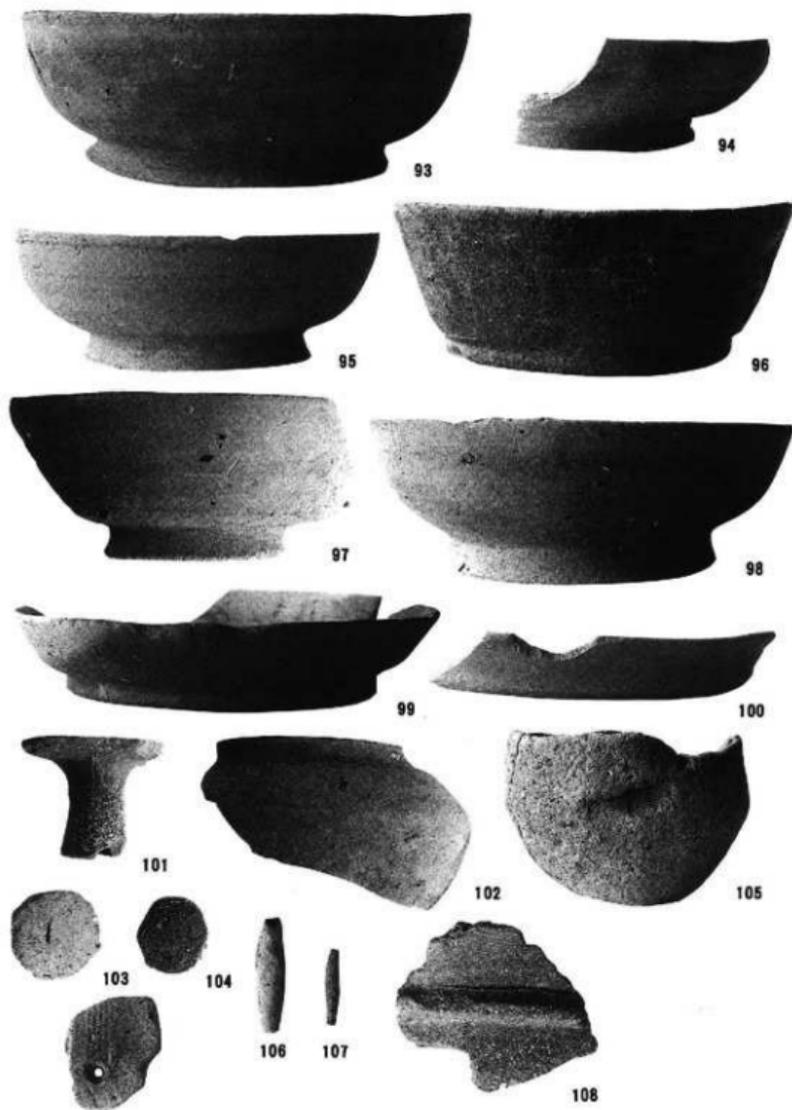




PL-17



平成2年度出土遺物



PL-19



111



112



113



114



115



116



117

平成2年度出土遺物

PL-20

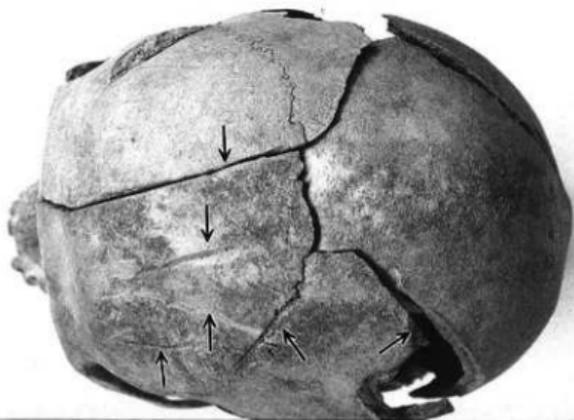
1. 頭骨出土狀況



2. 頭骨前面



3. 頭頂面





4. 右側頭面



5. 右側頭面
(右前頭部離開狀況)



6. 左側頭面

PL-22



7. 後頭面



幼獣

成獣

8. 獸骨



9. 同定不明 (上面)

タテチョウ遺跡発掘調査
報 告 書

1992年3月

発 行 松江市教育委員会

印 刷 有限会社谷口印刷
松江市母衣町89